帝國實業讀本

改制新版

卷五

3759
Ha7
資料室

42503
教科書文庫
4
810
44-1938
200030
2110

文部省檢定濟
昭和十三年一月十日　實業學校國語科用

帝國實業讀本

改制新版

文學博士　芳賀矢一　編
文學博士　上田萬年
文學士　長谷川福平　訂補

合資會社　冨山房發兌

資料室
3959
Ha7

千早ぶる
神の代より
日の本の
國のつくりてめと
立てしこの山

靈山に據る北畠顯家

磯田長秋筆

廣島大學圖書之印

廣島大学 教 35910 図書

帝國實業讀本 改制新版 卷五

目次

一 櫻花と日本人……平泉澄……一
二 春禽の聲……相馬御風……六
三 春宵漫歩……夏目漱石……九
四 吉野山……藤岡作太郎……一四
　楠公の遺跡（自修文）……田山花袋……一九
五 淡路島山（古歌）……二九
六 土の匂……長塚節……三一
七 希望（詩）……土井晚翠……三六
八 阿新丸……（太平記）……三九

九　松の下露……（太平記）…五〇
一〇　工業の戰爭……秋山眞之…五七
自動車王の印象（自修文）……澤田謙…六三
一一　清水（古歌）……七四
一二　田家の朝……七六
一三　山河の美……鶴見祐輔…八五
一四　海と日本文學……幸田露伴…九二
海洋文化國としての日本（自修文）……內ヶ崎作三郎…一〇一
一五　松葉仙人……（十訓抄）…一〇七
一六　高名の木のぼり……吉田兼好…一一〇
高名の木のぼり……一一〇
弓射る事……一一一
人の心すなほならねば……一一二

一七　作文趣味……高橋義雄…一一三
一八　歌物語……一二〇
上手の心……藤原信實…一二〇
關の秋風……（古今著聞集）…一二二
秋の青柳……（古今著聞集）…一二三
松ものいはゞ……（古今著聞集）…一二四
一九　建武の中興……北畠親房…一二六
二〇　人臣の道……北畠親房…一三一
二一　世界の最舊帝國……一三五
建國の昔と神祇の尊崇（自修文）……一四〇
二二　聖土（詩）……西條八十…一四七
二三　意義ある生活……永田秀次郎…一四九

廣島大學圖書之印

帝國實業讀本 改制新版 卷五

一 櫻花と日本人

平泉澄[一]

(一)歴史家、文學博士。東京帝國大學教授。明治二十八年(一八九五年)福井縣に生れた。

(二)大山津見神の御子。神阿多都比賣。

心醉

風尚

日本人の古來最も愛し來つた花は櫻である。古くは單に「木の花」と言つて、それで直ちに櫻の花をさした事は、木花咲耶姫[二]の御名からも考へられるのである。尤も支那文化全盛の時には、一時梅や牡丹がもてはやされた事もあり、西洋文明心醉の世には、暫く薔薇やダリヤの賞せられた事があつても、それは時代の流行を追ひ、風尚の變遷に伴なふ一時的傾向に過ぎないのであつて、結局するところ、櫻の花に對する日本人の愛好は、永久に動かす事が出來ないのである。

思ふに、櫻の花と日本精神との間には、極めて微妙な一致點があ

日本精神の象徴

この間の消息を道破する

つて、言はゞ、櫻の花こそは、日本精神の象徴とも言ふべきものである。本居宣長が

しきしまの大和心を人とはゞ
あさ日ににほふ山ざくら花

と歌つたのは、正にこの間の消息を道破したものである

(一)佐久良東雄といふ人は、元來僧侶であつたが、(二)天保十二年三十一歳の春、深く感ずるところあり、慨然として還俗し、純粹の日本人たらん事を期して、名を佐久良東雄と改めた。佐久良は言ふまでもなく櫻である。純粹の日本精神に立ちかへる時、人は櫻の花を聯想せずにはゐられないのである。姓にさへ附ける程であるから、東雄には櫻の花を詠じた歌が澤山ある。

天つ神いかなる神のこゝろより
さくらの花は咲かせそめけん

(一)勤皇家、國學者。常陸國の人。萬延元年(一八六〇年)歿、年五十。

(二)第百二十代仁孝天皇の御代。(一八一〇年)

還俗

豐榮のぼる

といひ、または

朝日かげ豐榮のぼるみよになりて
さくらの花を咲かせてしがな

などと歌つてゐるが、殊に勝れてゐるのは、

事しあらばわが大君のおほみため
人もかくこそ散るべかりけれ

といふ一首である。これは櫻の花の散るのを見て詠じた歌であるが、その散際の潔いのを見て、感歎に堪へず、一旦緩急あらば、天皇の御爲には、我等もまたこのやうに潔く散つて行かなければならないと、痛感して詠じたものであらう。

こゝまで來ると、櫻花と日本精神との關係は、一段と深刻切實になつて來る。櫻の花を見て、たゞその美はしさに恍惚となつてゐるのではない。時節到來して、さつと風に散行くその散際の潔さを喜

(一)國學者。會津の人。明治元年戊辰の役に(一八六八年)戰死した、年六十七。

(二)ドイツの哲學者。ロシヤに招かれて生れた。東京帝國大學文科大學講師となつた。(西紀一八四九—一九二八年)

牧歌的

無常迅速

ぶのである。野矢常方が

我が子には散れと教へておのれまづ
あらしに向ふさくら井のさと

と歌つたのも、この精神である。こゝまで來ると、櫻花は日本精神の殊に深刻切實なもの、卽ち武士道と相通ずるに至る。

哲人ケーベル(二)は

「櫻の花の頃こそ日本人を觀察すべき時である。これ、その牧歌的、哀歌的な天性の最も明らかに現れる季節だからである。絹の如く柔かな、華奢な、淡泊な、短命な櫻花こそ、實にその象徵である。日本人はこの美しい花の、束の間に萎み、さうして散行くその中に、我が生の無常迅速な譬喩を見、我が美と靑春とのはかなさを見るのである。櫻の花を眺めてゐる時、春のたゞ中に、秋の氣分が彼の胸に忍び入る。」

(一)文學者。本名はラフカヂオ。アイルランド人。父はギリシヤ人。母はギリシヤに生れた。明治二十三年來朝し、國籍を歸化し、八雲と名の小泉八雲等と相並んで、最も深く日本を愛し、最も善く日本を理解した人だけあつて、實に見事に、櫻の花に對する日本人の感情を捉へたものと言はなければならぬ。(一八五四年十七年—一九〇四年)

と言つた。流石は小泉八雲等と相並んで、最も深く日本を愛し、最も善く日本を理解した人だけあつて、實に見事に、櫻の花に對する日本人の感情を捉へたものと言はなければならぬ。

然り、確かに日本人は、櫻の花を見て、その忽ちにして散るを思ふのである。その風に散る散際の美しさを思ふのである。そして人もまた、かくの如く美しく咲いて、美しく散行く事を希望するのである。美しく咲く事の心に任せぬとしても、せめては美しく散る事を冀ふのである。どうせ散る命ではないか、惜しんでも百年の壽命は保たれないとすれば、惜しむところなく花と散らう。こゝに櫻の花を愛づる心は、直ちに勇往敢爲、死して悔ゆるところなき武士の精神につながる。「花は櫻木、人は武士」とは、古くから世に言ひはやされた諺であるが、花に四季色とり〴〵の趣はあつても、結局櫻を第一とする日本人は、その櫻の花を愛づる心の一脈直ちにつながる所、

國華　日本精神の精髄

武士といふものを日本人の特性の最も鮮かに發揮されたものとして、これを誇つたのである。それ故、櫻を國華とするならば、武士道はやがて日本精神の精髄だと言はなければならないのである。

――日本精神講座――

二　春禽の聲

相馬御風[一]

越後の私[二]たちの住んでゐるあたりでは、雪が消えて春になると、人々はもう次の冬に焚く爲の柴を刈りに山に行く。葉の出ないうちに雑木を刈つて來て、それを一年中乾かして置くのである。

その頃になると、私はいつも良寛[三]和尚の次のやうな詩を思ひ出す。

薪を擔うて翠岑を下る　翠岑道平かならず
時に息ふ老松の下　靜かに聞く春禽の聲

(一)詩人、評論家。名は昌治。明治十六年(二)(一八八三)新潟縣に生れた。

(二)新潟縣西頸城郡糸魚川町。日本アルプスの北端。

(三)曹洞宗の僧。俗姓は山本。越後國出雲崎の人。性極め淡、和歌を善くし、書を及びた。天保二年(一八三一)寂、年七十一五。

翠岑

幻に描く

生の歩み

そしてその詩を獨り靜かに口ずさんでゐるうちに、私はいつとなしに、さうした場合の良寛の姿を幻に描いてゐるのである。

「靜かに聞く春禽の聲」(河内舟人筆)

それぱかりでなく、山の路は平かでないといふこの詩の一句のうちに、私は人の世の勞苦の樣を想ひ、それを詠歎した良寛和尚の心持の深さを想ふと共に、時に老松の下に息うて靜かに春禽の聲に聽入ると歌つた和尚の心持に、一層強く引附けられるのである。

生の歩みは苦しい。それは恰も薪を擔うて、平かならぬ山の路を歩むやうなものである。しかも何といふ有難さであらう。その路には、時に息ふべ

き老松の根元があり、また其所には、靜かに聽入るに委せる樂しい春禽の聲がある。

私はわけてこの詩の最後の一句を愛誦して措かない。「靜かに聞く春禽の聲」といふ一句の奥には、限りない廣さがあり、深さがあるではないか。

しかし、私たちが時にそのいはゆる「老松の下に息うて靜かに春禽の聲を聞く」といふやうな深い心の歡を與へてもらへるのも、一方に、平かならぬ山の路を、薪を擔うて下るやうな勞苦があればこそである。この勞苦なくして、この詩の後の二句に歌はれたやうな歡を得ようとしても、それはだめである。山の泉の旨さを味はふ事の出來る者は、山路の險しさに苦しんだ者の外にはない。

それに就いて思ひ出すのは、私の友人のお母さんが、最期の病床に横たはりながら、頻りに達者な時分薪を採りに行つた山の谷川の水を、飲みたい〳〵と言つたといふ事である。しかも、親思ひの友人がわざ〳〵山まで行つて、その水を汲んで來て飲ませたにも拘らず、お母さんはそれを、どうしてもその谷川の水とは信じなかつたといふ事である。

春が來て、人々が山へ柴刈に行く頃になると、私はあの良寛和尚の詩を思ひ出すと共に、この友人のお母さんの話を思ひ出す。春の山には樂しみが多い。しかし、徒に遊山ばかりを目的に山に行く人に、山はほんたうの樂しみを與へてはくれないのではなからうか。私は時にそんな事を思つたりする。

三　春宵漫歩

夏目漱石[一]

山里の朧月夜に乘じてそゞろ歩きする。觀海寺[二]の石段を登りながら、「仰數春星一二三」といふ句を得た。余は別に和尚に逢ふ用事も

(一)小説家。名は金之助。東京市の人。大正五年歿、年五十。
(二)大分縣速見郡石垣村にある。

雞足山六寺海觀

ない。逢うて雑話をする氣もない。偶然と宿を出て、足の向くにまかせて、ぶら〳〵するうち、ついこの石段の下に出た。暫く「不レ許二葷酒一入ル山門」といふ石を撫でて立つてゐたが、急に嬉しくなつて登り出したのである。石段を登るにも骨を折つては登らない。一段登つてたたずむ時、何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。默然として我が影を見る。角石に遮られて三段に切れてゐるのは妙だ。妙だからまた登る。仰いで天を望む。寢ぼけた空の奥から、小さい星が頻りに瞬きをする。句になると思つてまた登る。かくして余はとう〳〵上まで登り詰めた。

石段の上で思ひ出す。昔鎌倉へ遊びに行つて、いはゆる五山(一)なるものをぐる〳〵尋ねて廻つた時、確か圓覺寺の塔頭(たつちゆう)であつたらう、やはりこんな風に石段をのそり〳〵と登つて行くと、門内から黄色な法衣を著た、頭の鉢の開いた坊主が出て來た。余は上る。坊主は

(一)鎌倉にある臨濟宗の五大寺。建長、圓覺、壽福、淨智、淨妙の五寺。

下りる。ずれ違つた時、坊主が鋭い聲で、

「何所へ御出でなさる」

と問うた。余はたゞ

「境内を拜見に」

と答へて、同時に足を停めたら、坊主はすぐに、

「何もありませんぞ」

と言ひすてゝ、ずた〳〵下りて行つた。餘り洒落だから、余は少しく先を越された氣味で、段上に立つて坊主を見送ると、坊主はかの鉢の開いた頭を振立て〳〵、遂に姿を杉の木の間に隱した。その間かつて一度も振返りはしない。成程禪僧は面白い、きび〳〵してゐるなと、のつそり山門をはいつて見ると、廣い庫裡も本堂もがらんとして、人影はまるでない。余はその時に心から嬉しく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こんなに洒落に人を取扱つてくれた

かと思ふと、何となく氣分が晴々した。禪を心得てゐたからといふ譯ではない。禪の「ぜ」の字も未だに知らぬ。たゞあの鉢の開いた坊主の所作が氣に入つたのである。

かうやつて美しい春の夜に、何等の方針も立てずに歩いてゐるのは實際高尚だ。興來れば、興來るを以て方針とする。興去れば、興去るを以て方針とする。句を得れば、得た所に方針が立つ。得なければ、得ない所に方針が立つ。しかも誰の迷惑にもならない。

「仰ぎて數春星一二三」の句を得て石段を登り盡した時、朧に光る春の海が、帶の如くに見えた。山門をはいる。絶句は纏める氣にならなくなつた。卽座に止めにする。

石を甃んで庫裡に通ずる一筋道の右側は、岡つゝじの生垣で、垣の向ふは墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い所で幽に光る。數萬の甍に數萬の月が落ちたやうだと見上げる。何所やらで頻りに

朧に光る春の海

つゝじ（躑躅）

鳩の聲がする。棟の下にでもゐるらしい。

雨垂落の所に妙な影が一列に竝んでゐる。木とも見えぬ。草では無論ない。感じから言ふと、又平のかいた鬼の念佛が、念佛を止めて踊つてゐる姿である。本堂の端から端まで一列に行儀よく竝んで、踊つてゐる。その影が、また本堂の端から端まで一列に行儀よく竝んで、踊つてゐる。朧夜にそゝのかされて、鉦も撞木も奉加帳もうち捨てゝ、誘ひ合はせるや否や、この山寺へ踊りに來たのだらう。

近寄つて見ると、大きなさぼてんである。高さは七八尺もあらう。絲瓜程な青い胡瓜を杓子のやうに壓しひしやげて、柄の方を下に、上へ〳〵と繼合はせたやうに見える。あの杓子がいくつ繋がつたらおしまひになるのかわからない。今夜のうちにも庇を突破つて、屋根瓦の上まで出さうだ。あの杓子が出來る時には、何でも不意にどこからか出て來て、びしやりと飛附くに違ない。古い杓子が新し

大津繪の開祖。通稱大津又平。大津の人。姓氏、生歿年不詳。

さぼてん（仙人掌）

い小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちにだん〳〵大きくなるやうには思はれない。杓子と杓子との連續がいかにも突飛である。こんな滑稽な樹は、世の中にたんとあるまい。しかも澄したものだ。

—漱石全集—

四　吉野山

(一)藤岡作太郎

景色よき地には歴史上のゆかしさなく、歴史上にゆかしき地には景色に風情なきものの世には多かるに、景色と歴史とを兼ね備ふる、これ吉野が天下無雙の名區たる所以なるべし。

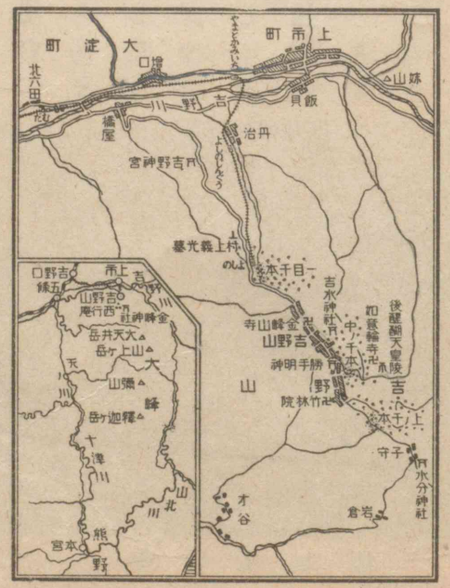
抑、大和は人皇以來最も古く開けし國なれば、隨つてこの地も山間の僻地ながらよく世に知られけらし。南和及び紀伊は木材に富みたる所、それを都に運ぶには、先づこの地に集めけん。年々に大宮へ參りて、毛の荒物、毛の和物を貢ぎける國栖といふやま人も、この

(一)國文學者、文學博士。金澤市の人。明治三十四年(一二五七〇年)歿、四十一年。

僻地

あたりにや住みけん。

世稍降りては、虎を野に放つと謠はれ給ひし飛鳥淨御原の天皇が世を避けて風雲に乘ぜん勢を養ひ給ひし所。天女が天降り、袖飜し舞ひて大御心を慰め奉りぬといふ五節の舞の起原は、袖振山にその名を留めたり。葛城の神を役して大峯を開きたりといふ役行者は熊野より分入り、醍醐寺の開祖たる聖寶僧正は此所より大峯に分入りしなるべし。爾來大峯を奥院とし、吉野を本院として、參詣する者跡を絶たず、金峯山寺の山僧は、南都、北嶺と肩を比べぬ。



(一)第四十代天武天皇。天皇の宮を飛鳥淨御原宮と言つた。

(二)中古十一月常寧殿で行はれた舞。

(三)奈良縣葛城山の一言主神。

(四)吉野の中央を走る山脈。

(五)名は小角。文武天皇の頃の人。葛城山の巖窟に居ること三十餘年。

(六)京都市伏見區醍醐にある。

(七)讃岐の人。理源大師。延喜九年(一九〇年)寂、年七十八。

(八)吉野山にある。昔は天台宗。天台眞言兩宗。

(九)奈良(興福寺)。

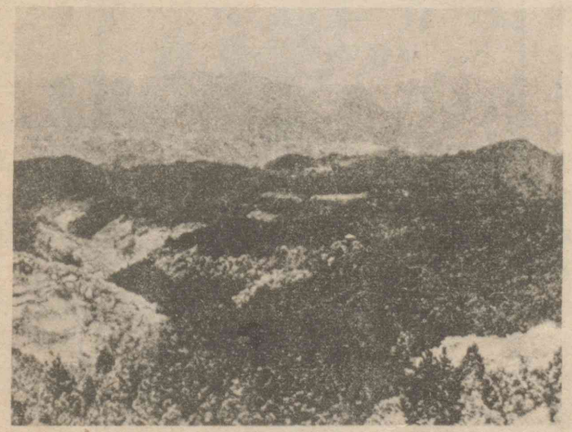
(一〇)比叡山(延暦寺)。

(一)檢非違使尉源義經。
(二)佐藤嗣信。
(三)佐藤忠信。
(四)第九十六代後醍醐天皇。

源延尉が昨日に變る今日の恨、屋島に寵臣の兄を失ひしは傷ましけれど、勝利に誇りし時なり。今その弟を失ふ。失意落膽の時、英雄の涙そもいかなりけん。

その後數世、建武中興の政亂れて、吉野朝五十七年、かゝる山中を都と定め給ひけるよ。花咲き花散る時、聖帝の思、月盈ち月虧くる時、百官の涙。かゝる哀れは古へに見ざるところ、後の世にもまたありなんや。延元の御門の御製に、

みやこだに
さびしかり
しを雲晴れぬ



吉野山全景

(一)吉野朝の忠臣。名は彦四郎。信濃の人。
(二)後醍醐天皇の第一皇子護良親王。建武二年(一九九五)、御年二十八。
(三)天合座主。長承四年(一一七五)、年七十九。
(四)「もろともにあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし」(金葉集)
(五)鎌倉時代の僧。俗名は佐藤義清。建久元年(一一八九)、年七十三。
(六)「吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらん」(新古今集)

よし野のおくの
さみだれのそら

村上義光は大塔宮に代りて骨を櫻の蔭に埋め、楠木正行は君に名殘を惜しみて雲の中より出づ。草木無情、春に榮ゆる事その後幾たびぞ。運命の寵兒豐太閤は將卒妻子を率ゐて此所に豪遊し、杯を擧げ花に對して氣を吐く事千丈、古への英雄が失敗の跡をや笑ひけん。

大僧正行尊は「花より外に知る人もなし」と知己の得難きを恨み、西行法師は「やがて出でじと思ふ身を」と言ひて妄語の誹をや得げん。獨り天下の名所を探る蕉翁が風

吉野山全景

流。母に侍して一生の望足れりとする山陽が孝行。その名所を記する事、質にして要を得たるは益軒が筆。(一)鈴の屋が(二)「菅笠日記」なども永く人に忘れられざらん。一句にして吉野を盡せるもの、名所としては貞室が

これは〳〵と
ばかり花の吉野山

舊跡としては支考(四)が

歌書よりは
軍書に悲し吉野山

などありかばかり名だゝる地にして、古人の筆の至れり盡せるを、今更に我等が拙き筆にまた何をか言はん、何をか記さん。

源廷尉と忠信（林雲鳳筆）

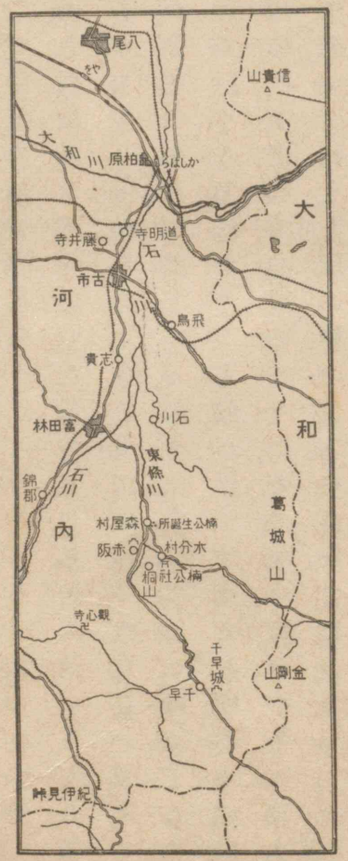
(一)和州巡覽記。
(二)本居宣長の號。
(三)俳人。安原氏。延寶元年（一六七三年）歿、年六十四。
(四)俳人。各務氏。蕉門十哲の一。享保十六年（一七三一年）歿、年六十七。

自修文

楠公の遺跡

田山花袋

嘗て湊川(一)の古戰場を弔つた時、自分はつく〴〵正成の死を思ひ、義貞(二)の死を思ひ、吉野朝の運命のはかないのを思つて、前の海の暗くなるのも知らずに、長い間追懷に耽つた。追懷の餘り、自分は遂に路を迂して河内に入り、赤阪、千早の遺跡を訪ひ、金剛(五)の峻險を攀ぢて、櫻雲(六)深き吉野山に、吉野朝五十年の悲劇の跡を弔はうと決心した。そして神戸の宿を出た。



(一)小說家。名は錄彌。群馬縣の人。昭和五年歿、年六十。
(二)兵庫縣神戸市湊東區。楠木正成を祭る別格官幣社湊川神社、湊川公園等がある。
(三)新田義貞。吉野朝の忠臣。延元三年（一九八三年）越前國藤島に戰死、年三十八。
追懷　過ぎた事を思ひかへすこと。
迂して　遠まはりして。
(四)大阪府（河內國）南河內郡赤阪村。
峻險を攀ぢる　けはしい山を登る。
(五)金剛山。大阪府の東南隅に聳える。海拔一一一一メートル。千早城址は山の西中腹にある。

(一)南河内郡。
(二)金剛山あたりの谷水を合せて大和川に注ぐ川。
(三)南河内郡道明寺村。眞言宗の尼寺。
絲遊　かげろふのこと。

始めて懷かしい金剛山の翠色に接したのは、柏原の停車場をおりて、石川の長橋をこれから渡らうとした時であつた。この日はよく晴れてゐて、この頃の空に懸りがちな霞も、いつものやうに深くは懸らず、美しい日の光が、きら〳〵とその山の一面に輝きわたつて、空氣の加減であらうが、どうかすると、秋の初の空ではないかと疑はれる程であつた。じつと見ると、ふは〳〵した雲が、半腹よりも少し上かと思ふあたりに、面白くたなびいてゐて、その緣が金色のやうに、美しく日の光に輝いてゐる。けれどこの雲も、歩いて行くうちにだん〳〵形が變つて來て、道明尼寺の前に來た頃には、丁度吹流の旗のやうになつて、今ははやその頂上近くまで靡いて行つた。風の麥の葉末を動かす程もなくて、絲遊がぎら〳〵と菜の花の畑の上に漂つてゐる樣は、何とも言へぬ程長閑に感じられた。自分は絶えず金剛山に眼をそゝぎながら、色々な事を考へつゝ歩いた。

(一)南河内郡藤井寺町。正平二年楠木正行が此所で足利勢を破つた。
殊勝　けなげ。神妙。
駈惱ます　敵陣に駈入つて敵を苦しめる。
(二)南河内郡富田林町。
黎明　よあけがた。
(三)金剛山の北。
(四)富田林の町を東へ出るとすぐ石川の橋を渡ることになる。
(五)南河内郡赤阪村の字
篤志　よい心がけ。
得々として　いかにも自慢さうに。

藤井寺を過ぎて、正行が殊勝にも兵をこの間に出して、幾たびとなく足利の大軍を駈惱ました事などを思ひ、その夜は有名な古戰場富田林の寂しい旅籠屋に一泊したが翌日まだ黎明の頃に其所を立つて、次第に金剛山の麓の方へ〳〵と進んで行つた。

昨日と同じやうに、金剛山はすつかり晴れて、連なつてゐる葛城山にさへ、一片の雲も懸つてゐない。それから石川の橋を渡つて、森屋村の方へ志して行くと、だん〳〵金剛山に近くなつて、もう山のしわなども、少しづゝ見え始めて來るやうになつた。ところが或路の角で、自分は米を擔つて千早まで行くといふ一人の中老の男と道連になつた。

「楠公さんへ行かれるのか。それはどうも篤志の事だ」

と、自分が千早へ行くのであるといふ事を聞いて、彼はさも〳〵嬉しげに口を開いた。そして行く〳〵色々と楠公さんの事を、自分の親でゞもあるかのやうに、得々として語り聞かせた。

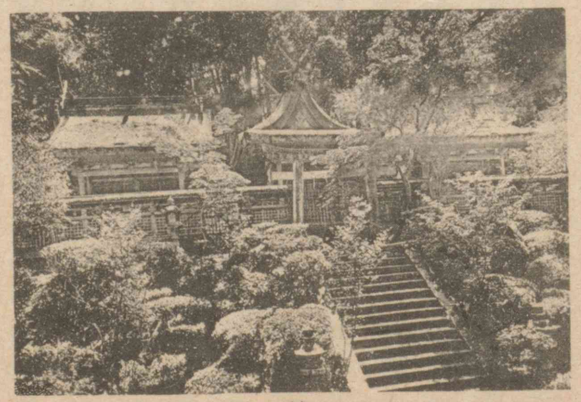
(一)赤阪村の大字である二河原邊のなまり。
(二)赤阪村の字。
(三)恩地左近太郎。楠木四天王の一。
たくらむ　くはだてる。

[楠公さんは何でも尋常人ぢやない。楠公さんの赤阪の城にゐられる時には、城には水がないからと言つて、(一)にからみの城から天狗が水を運んで行つたといふ事だ。それ、こつちを見なさい、煙の立つてゐる山の所に、ちよつと瘤のやうな山があらうが、……あれがその、にからみの城と言つて、あすこには楠公さんの使つてゐる天狗が、どれ程ゐたか知れないといふ事だ。……いゝや、今でもまだその天狗殿が殘つてゐて、どうかすると、夜なんどは姿を變へて村へ出て來て、楠公さんの話をして聞かせるさうだ。それからそのそばに少し寄つて、丘みたやうになつてゐる所が見えよう。あれは桐山(二)の城と言つて、此所には家來の恩地(三)といふ人を籠めて置いて、三方から敵を圍んでしまふやうにたくらんだといふ事だ。何でも楠公さんは尋常人ぢやない。]

[今少し行つたら、赤阪の城が見えよう。]

障壁　かこひのかべ。
(一)和泉と河内。
(二)赤阪村の大字。

と、その男は森屋村の入口の水車の懸つてゐる橋の所でかう言つたが、一二町行くと、果して障壁を立てたやうな、いかにも城の址とも思はれるやうな高い平な丘が見え始めて、その上には、菜の花が、毛氈を掛けたやうに、幾段にも美しく階段を作つてゐる。自分はそれが赤阪の城址だといふ事を聞いて、非常に懷かしい心地がしたが、その城址に登つて、遙かに泉(一)河二州の平野を見わたしたのは、それから水分(二)の楠公社に詣で、楠公生誕所の址を尋ねて、板を立てたやうな坂をなほ一登りした後である。城址といふのは、さして廣い所でもないが、流石は名將の眼識で選んだ程あつて、


水分楠公社

地の利　土地の形勢のよいこと。孟子に「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず。」とある。

本丸　城郭の中央で、全城郭中最も主要な箇所。

その地の利に富んでゐる事は、自分等が見ても成程とうなづかれるばかりである。前は一望千里と言はれる廣々とした平原で、後は金剛山の峻嶺が幾重ともなく重なり合つてゐて、その中を千早へ通ふ一筋の路が、山を越えつ川をめぐりつして、遙々とついてゐる。であるから、にからみ、桐山の二城と、壘を連ねて互に相應援したならば、敵は容易にこの赤阪の城下に押寄せる事は出來なかつたに相違ない。けれども開いてゐるだけに、事によると攻落される憂はないでもないから、正成はそれを慮つて、本丸を千早の山奥にと築いたのであらう。千早は其所から五十町程山奥で、路と言つてはほんの一筋路で、右も左も仰ぐばかりの高山に圍まれて、それは〳〵谷間の奥の奥と言つた

赤阪城址

奇兵　敵の不意に乘じておそひかかる兵。

孤城　一つだけで援のない城。

大義を唱へる　君國に對する臣民の義理を唱へる。

やうな、極めて險しい所であるから、どれ程多人數で攻圍んでも、何の功をも奏する事が出來なかつたのである。

自分は赤阪の城址に立つて、正成が屢〻奇兵を出して敵の大軍を惱ましたる樣やら、城の遂に支へられぬのを覺つて、火を城に放つて千早の山奥に隱れた事やら、天下の兵をこの孤城に引受けて、孤立大義を唱へた樣の、どんなに雄々しかつたかといふ事やらを、久しくなるまで思ひやつたが、遂に思ひ切つて、そのまゝ千早の古址へと向つた。

千早村

行つて見ると、その村は、これが有名な千早かと驚かれるばかりの寒村で、自分はなんだか、秩父の山奥へでも迷ひ入つたやう

潺湲　水の流れる音。
ばつたり　水車の一種。
歷落　入りまじつてならぶさま。
一輪の塔　基石の上に一つの圓い石を置いて上に笠石をのせたもの。
天險　自然の要害。

な心地がした。村中には一道の清溪が潺湲と流れてゐて、水車や、ばつたりなどが到る所に懸けられて、さも面白げにめぐつてゐるが、その兩岸に茅ぶき屋根の粗末な家が、四五十軒許歷落と連なつてゐて、所々には木挽小屋などもまじつてゐるのが見える。そして向ふの山で木を伐る音が、丁々と雲中に響いて聞える。

このやうな所で、よくも八十萬の兵を防ぐ事が出來たと思ひながら、駄菓子屋の前の土橋を渡つて、少し前に教へられた村人の言葉通りに、小學校の前から、麥畑や菜畑の段をなしてゐる間を、てく〳〵と登つて行つた。すると、間もなく一輪の塔の立つてゐる坂の登口の所へ出て、尙其所を一町程登ると、山の半腹に少しく廣々とした所があつて、其所が卽ち有名な千早の城の址であつた。自分はこの傍に祀られてある楠公祠の前に禮拜して後、その城址を彼方此方とさまよひ歩いた。誠に天險と言つてもこれ程天險の所はあるまいと思はれる程で、これではいくら大兵

據ない　いたし方がない。
首塚　首を埋めた場所のしるしの塚。
榛莽　亂れ繁つた草木。
(一)正成の第三子。正行の弟。(一二〇〇元中年中—一四〇四年—一二〇五二年)歿。
末葉　末孫。子孫。

が攻寄せても、容易に攻落す事が出來なかつたのも無理ではないと思つた。けれども地理の上から考へてみると、正成が此所に籠つたのは、丁度土龍が穴の中に引つこんだのと同じ事であるが、それも據なかつた事であらうと自分は思つた。

首塚やら、屋敷址やらを普く探つて、また更に一歩二歩登つて行くと、非常に風情のある老松が幾本となく茂つてゐて、路はその間を金剛山へと登つてゐる。自分はこの路を少し曲らうとして、それとなく、傍の榛莽の中に埋められたやうになつて、古い石の玉垣で圍まれた一基の圓い墓石の、しよんぼりと立つてゐるのを認めたから、誰の墓かと近寄つて見ると、其所には「楠正儀墓」と明らかに記されてある。

自分は急に悲しくなつた。それは、今この墓を見て、楠氏の末葉が微々たる有樣になつてからも、どんなに吉野朝に力を致したかといふ事に想ひ到つたからで、日本全國の勤王の士が、大方敵

軍に降つてしまつた後までも、正儀、正忠等が纔かにこの千早を保つて、始終正義の爲に節を變へなかつたのを思ふと、自分は全く涙をこぼさずにはゐられなかつた。殊に歴史では、この正儀が一度敵軍に降つたといふ事を惡しざまに記して、父祖の志を辱めた者であるなど、一概におとしめて論じてあるが、しかし、それは眞の心ではなくて、吉野朝の振はぬのを慨歎した餘り、色々と思案した結果、唯ほんの一時の方便に、敵軍に降つたのではあるまいか。そして若しそれが果して一時の方便であつたのに、その志も行へず、その苦肉の計も遂げられず、徒に不忠不孝の者と後に嘲けられたのであつたなら、正儀の口惜しさはどんなであらう。自分の涙は愈〻溢れた。

頭上では幾百年を閲した老松が、冬の初の時雨のやうな寂しい音を立てゝゐる。自分はその悲しい寂しい音を聞きながら、つくづくと六百年前の事に思ひ耽つた。

——花袋紀行集——

(一)和田氏。男山の戰に利なくして募兵の爲に節を變へなかつたのを思ふと、自分は全く涙をこぼさずにはゐられなかつた。歸國したが、遂に病死した。

おとしめる　見くだす。

方便　手段。方法。

苦肉の計　自分の身を苦しめて敵をあざむくはかりごと。

幾百年を閲した老松　幾百年も經た老松。

五　淡路島山

春といへば霞みにけりなきのふまで　　(一)俊惠法師
なみまに見えし淡路しま山

かすみたつ春の山邊は遠けれど　　(二)在原元方
吹きくる風は花の香ぞする

月夜にはそれとも見えず梅の花　　(三)凡河内躬恒
かをたづねてぞ知るべかりける

見わたせば柳さくらをこきまぜて　　(四)素性法師

(一)平安時代の歌人。俊頼の子。

(二)平安時代の歌人。業平の孫。天暦七年(一一六一年)歿、年六十六。

(三)平安時代の歌人。古今集撰者の一人。延喜七年(一一六七年)歿、四十九。

(四)平安時代の僧。俗稱良岑玄利。僧正遍昭の子。清和天皇(八一一年—八一六年)に仕へた。歿年不詳。

花見つゝ分はしなられは淺雲のおくにしおしみ思ひのみ山野の契沖

(一)江戸時代の學僧。摂津尼ケ崎の人。元禄十四年(二六一年)寂、年三十二。

みやこぞ春の錦なりける
さくら狩雨はふり來ぬ同じくは
ぬるとも花のかげに隱れん

よみ人知らず

契沖筆蹟

霞とも雨とも空はわかぬ間に
たまぬきそむる青柳のいと

(一)契沖

大江千里

照りもせずくもりもはてぬ春の夜の
おぼろ月夜にしくものぞなき

(一)歌人、小説家。茨城縣の人。大正四年歿、年三十七。

はやて　空際

ちみな蕾

蟄居

をしめども春の限りのけふの日の
夕ぐれにさへなりにけるかな

よみ人知らず

六　土の匂

(一)長塚節

春は空からも、土からも微に動く。毎日のやうに、西から埃を卷いて來るはやてが、どうかするとはたと止つて、空際にはふは〳〵して綿のやうに白い雲が、ほつかりと暖かい日光を浴びようとして、僅かに立騰つたといふやうに、じつと動かずにゐる事がある。水に近い濕つた土が、暖かい日光を念ふ一杯に吸つて、その勢づいた土の微な刺戟を根に感じさせると、田圃のはんの木のぢみな蕾は目に立たぬ間に少しづゝ伸びて、ひら〳〵と動き易くなる。その刺戟から、蛙はまだ蟄居の狀態にありながら、稀にはそつちでも、こつち

でも、くゝくゝと鳴き出す事がある。空から射す日光はそろ〳〵と熱度を増して、土はそれをいくらでも吸つて止まない。土はすべてをだん〳〵と刺戟して、堀のほとりには蘆や、芝や、その他の草が空と相映じて、すつきりとその首を擡げる。軟かさに滿された空氣を更に鈍くするやうに、はんの木の花はひら〳〵と止まず動きながら、煤のやうな花粉を撒きちらしてゐる。蛙は假死の狀態からはなれて、軟かな草の上に手を突いては、驚いたやうな樣子をして、空を仰いで見る。さうして彼等はあわてたやうに聲を放つて、その長い睡眠から復活した事を空に向つて告げる。それで

歌旅の長塚節（高柳淳筆）

本性

遠く聞く時には、彼等の騷がしい聲は、唯空にのみ響いて快げである。

彼等は更に、春の到つた事を一切の生物に向つて促す。草や木が心附いて、その活力を存分に發揮するのを見ないうちは、鳴く事を止めまいと力める。田圃のはんの木は疾うに花を捨てゝ、自分から先に、嫩葉の姿になつて見せる。黄色みを含んだ嫩葉が、爽かな朝日を浴びて快い光を保ちながら、蒼空の下にまだためらつてゐる周圍の林を見る。岬のやうな形にはつてゐる水田を抱へて、周圍の林は漸くその本性のまに〳〵、勝手に白つぽいのや、赤つぽいのや、黄色つぽいのや種々に茂つて、それが氣が附いた時に、急いで一つの深い綠になるのである。雜木林のそこらこゝらに散在してゐる開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆の花も可憐な黑い瞳を聚めて、まぶしさうに葉の間から、こつそり四方をのぞく。雜木林の間には、

また芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。その麥や芒の下に居を求める雲雀が、時々空を占めて、「春がふけた」と呼びかける。さうすると、その同族の聲のみが空間を支配してゐるべきはずだと思つてゐる蛙は、その囀る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛びこえ飛びこえ鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中にのみ、これを仰げばまばゆさに堪へぬやうに、その身を遙かに煌く日の光の中に沒して、その小さい喉のちぎれるまでは、激しく鳴らさうとするのである。蛙は愈〻益〻鳴きほこつて、かしの木のやうな大きな常磐木の古葉をも、一時にからりと落さねば止むまいとする。この時、すべての樹木や、それから冬季の間にはぐつたりと地に著いてゐたすべての雜草が爪立して、たゞ空へ〳〵と暖かな光を求めて止まぬ。土がそれをじつと引きとめて放さない。それで一切の草木は、土と直角の

しけ絲(絃)

聲を呑む

度を保つてゐる。冬季の間は土と平行する事を好んでゐた人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して、銘々に手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふ程喉の袋を膨脹させて、身を撼かしながら、殊更に鳴きたてる。白いしけ絲のやうな雨は、水が田に滿ちるまでは、注いでまた注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生れて來た蛙は、刈株を引返し〳〵働いてゐる人々の周圍から足下から迫つて、敏捷にその手を動かせ〳〵と促して止まぬ。蛙がぴつたりと聲を呑む時には、日中の暖かさに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。更にひつそりと靜かな夜になると、蛙はいかに自分の聲が遠く且遙かに響くかを誇るやうに、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲はめつきり遠く〳〵隔つて、それがぐつたりと疲れた耳をくすぐつて、百姓のすべてを安らかな眠に誘ふので

ある。熟睡する事によつて百姓は皆短い時間に肉體の消耗を恢復する。彼等が雨戸の隙間から通す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外へ出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲にその覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を呼返すのである。草木は遠く遙かに響けと鳴くその聲に搖られつゝ、夜の間に成長する。くぬぎや、ならや、その他の雜木は、蛙が鳴けば鳴く程、さうしてそれが鳴きやむ季節までは、いくらでも繁茂する事を繼續しようとする。其所には、毛蟲やその他のあさましい損害が或はあるにしても、しとしとと屢〻梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふやうに、力强い綠が地上を掩うて、爽かな涼しい蔭を作るのである。——土——

七希望

土井晚翠[一]

沖の汐風吹きあれて

白波いたくほゆる時、
夕月波にしづむ時、
黑暗(くらやみ)よもを襲ふ時、
空のあなたに我が舟を
導く星の光あり。

ながき我が世の夢さめて
むくろの土にかへる時、
心のなやみをはる時、
罪のほだしの解くる時、
墓のあなたに我が魂(たま)を
導く神の御聲あり。

(一)詩人、英文學者。第二高等學校名譽教授。名は林吉。明治四年(一八七一年)仙臺市に生れた。

仇さわぎ

啓示

なげき、わづらひ、くるしみの
海にいのちの舟うけて、
夢にも泣くか塵の子よ、
浮世の波の仇さわぎ、
雨風いかにあらぶとも、
忍べ、とこよの花にほふ。

港入江の春告げて、
流るゝ川に言葉あり。
燃ゆる焔に思想あり。
空行く雲に啓示あり。
夜半のあらしに諫誡あり。
人の心に希望あり。

——天地有情——

(一)第九十六代後醍醐天皇。
(二)權中納言。元弘二年(一九二年)北條氏の臣に殺された。
(三)藤原氏。才學があつたが、元弘二年北條氏に害せられた。
(四)藤原氏。
一途
(五)正中二年。(一九八五年)
(六)宗忠。
(七)今、京都市右京區花園町にある。古義眞言宗の大本山。
冥途

八阿新丸

さる程に、君の御企を申し勸めけるは、(一)源中納言具行、(二)右少辨俊基、(三)日野中納言資朝なり。各死罪に行はるべしと評定一途に定まつて、先づ去年より佐渡國に流されておはする資朝卿を斬り奉るべしと、(五)その國の守護本間山城入道に下知せらる。(六)この事京都に聞えければ、この資朝の子息邦光の中納言、その頃は阿新殿とて、歳十三にておはしけるが、父の卿囚人になり給ひしより、(七)仁和寺邊に隱れてをられけるが、父誅せられ給ふべき由を聞いて、「今は何事にか命を惜しむべき。父と共に斬られて冥途の旅の伴をもし、また最期の御有樣をも見奉るべし」とて、母に御暇をぞ乞はれける。

母御頻りに諫めて、「佐渡とやらんは人も通はぬ怖しき島とこそ聞ゆれ。日數を經る路なれば、いかんとしてか下るべき。その上、汝に

さへ離れては、一日片時も命存ふべしとも覺えず」と、泣悲しみて止めければ、「よしや伴なひ行く人なくば、いかなる淵瀨にも身を投げて死なん」と申しける間、母いたく止めば、また目の前に憂き別れもありぬべしと思ひわびて、力なく、今まで唯一人附添ひたる中間を相添へて、遙々佐渡國へぞ下されける。

路遠けれども乘るべき馬もなければ、履きも習はぬ草鞋に、菅の小笠を傾けて、露分けわくる越路の旅、思ひやるこそ哀れなれ。都を出でゝ十日餘りと申すに、越前の敦賀(一)の津に著きにけり。これより商人船に乘りて、程なく佐渡國にぞ著きにける。人してかうと言ふべき便もなければ、自ら本間が館に至つて、中門の前にぞ立ちたりける。をりふし僧のありけるが立出でゝ、「この内への御用にて御立ち候か。またいかなる用にて候ぞ」と問ひければ、阿新殿「これは日野中納言の一子にて候が、この頃斬られさせ給ふべしと承つて、その

(一)今、福井縣敦賀市。日本海岸の良港。

心ある人

おろそかならぬ體

最期の樣をも見候はん爲に、都より遙々と尋ね下りて候」と言ひもあへず、涙をはら〳〵と流しければ、この僧心ありける人にて、急ぎこの由を本間に語るに、本間も岩木ならねば、流石哀れにや思ひけん、やがてこの僧を以て持佛堂に誘ひ入れて、踏皮、はゞきぬがせ、足洗ひて、おろそかならぬ體にてぞ置きたりける。

阿新殿これを嬉しと思ふにつけても、「同じくは父の卿を疾く見奉らばや」と言ひけれども、今日明日斬らるべき人にこれを見せては、なか〳〵冥途の障ともなりぬべし。また關東への聞えもいかゞあらんずらんとて、父子の對面を許さず、四五町隔てたる所に置きたれば、父の卿はこれを聞きて、行方も知らぬ都にいかゞあらんと思ひやるよりもなほ悲し。子はその方を見やりて、浪路遙かに隔りし鄙の住居を思ひやつて、心苦しく思しつる涙は更に數ならずと、袂の乾くひまもなし。これこそ中納言のおはします牢の中よとて

見やれば、竹の一むら茂りたる所に堀掘廻らし、塀塗つて、行通ふ人も稀なり。情なの本間が心や。父は禁籠せられ、子は未だ幼し。たとひ一所に置きたりとも、何程の怖かあるべきに、對面をだに許さで、まだ同じ世の中ながら生を隔てたる如くにて、亡からん後の苔の下、思寢に見ん夢ならでは、相見ん事も有難しと、互に悲しむ恩愛の父子の道こそ哀れなれ。

日野資朝
（菊池容齋筆）

五月二十九日の暮程に、資朝卿を牢より出し奉りて、「遙かに御湯も召されぬ候はぬに、御行水候へ」と申せば、はや斬らるべき時になりけりと思ひ給ひて、「嗚呼、うたてしき事かな。我が最期の樣を見ん爲に遙々と尋ね下りたる幼き者を、一目も見ずして果てぬる事よとばかり宣ひて、その後は曾て諸事につけて言葉をも出し給はず。今

うたてし

頌

朝までは氣色しをれて、常には涙を押拭ひ給ひけるが、人間の事に於ては、頭燃を拂ふ如くになりぬと悟つて、唯綿密の工夫の外は、餘念ありとも見え給はず。夜に入れば輿さし寄せて乘せ奉り、此所より十町許ある河原へ出し奉り、輿かき据ゑたれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直つて、辭世の頌を書き、筆をさしおき給へば、斬手後へ廻るとぞ見えし、御首は敷皮の上に落ちて、むくろは猶坐せるが如し。この程常に法談なんどし給ひける僧來りて、葬禮形の如く取營み空しき骨を拾ひて阿新に奉りければ、阿新これを一目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、「今生の對面終にかなはずして、變れる白骨を見る事よ」と、泣悲しむも理なり。

阿新未だ幼稚なれども、健氣なる所存ありければ、父の遺骨をば唯一人召使ひける中間に持たせて、「先づ我より先に高野山(一)へ參りて、奥の院とかやに納めよ」とて、都へ歸し上せ、我が身は勞る事ある

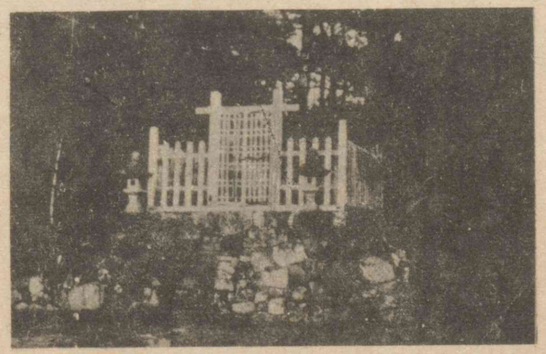
(一)和歌山縣伊都郡。紀ノ川の南岸。眞言宗古義派の總本山金剛峯寺。

勞る事

遠侍

由にて、なほ本間が館にぞ留りける。これは本間が情なく父を今生にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふ故なり。かくて四五日經ける程に、阿新晝は病の由にて終日に臥し、夜は忍びやかにぬけ出でゝ、本間が寢所なんどこまごまに窺うて、隙あらばかの入道父子が間に一人刺殺して、腹切らんずるものをと、思ひ定めてぞ狙ひける。

或夜風雨烈しく吹いて、宿直する郎等どもも皆遠侍に臥したりければ、今こそ待つところの幸ひよと思ひて、本間が寢所の方を忍びて窺ふに、本間が運や強かりけん、今夜は常の寢所を變へて、いづくにありとも見えず。また二間なる所にともしびの影



資朝の墓

時に取つては

左右なく

究竟の事こそあれ

の見えけるを、これは若し本間入道が子息にてやあるらん、それなりとも討ちて恨を散ぜんと、ぬけ入りてこれを見るに、それさへ此所にはなくして、中納言殿を斬り奉りし本間三郎といふ者ぞ、唯一人臥したりける。よしやこれも時に取つては親の敵なり、山城入道に劣るまじと思ひて、走り掛らんとするに、我は元來太刀も刀も持たず、唯人の太刀を我が物と頼みたるに、ともしび殊に明らかなれば、立寄らばやがて驚き合ふ事もやあらんずらんと危みて、左右なく寄り得ず、いかゞせんと案じ煩うて立ちたるに、をりふし夏なれば、ともしびの影を見て、蛾といふ蟲のあまた明障子に取附きたるを、すはや究竟の事こそあれと思ひて、障子を少し引きあけたれば、この蟲あまた内に入りて、やがてともしびをうち消しぬ。今はかうと嬉しくて、本間三郎が枕に立寄りて探るに、太刀も刀も枕にあつて、主はいたく寢入りたり。先づ刀を取つて腰にさし、太刀を拔いて

素意

胸元にさし當てゝ、寢たる者を殺すは死人を殺すに同じければ、驚かさんと思ひて、先づ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚く所を、一の太刀に臍の上を疊までつと突通し、返す太刀に喉笛刺斬つて、心靜かに後の竹原の中にぞ隱れける。

本間三郎が一の太刀に胸を通されてあつといふ聲に、番衆ども驚き騷ぎて、火を點してこれを見るに、血のつきたる小さき足跡あり。「さては阿新殿の仕業なり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出でじ。搜し出して打殺せ」とて、手に〳〵松明を點し、木の下、草の蔭まで、殘る所なくぞ搜しける。

阿新は竹原の中に隱れながら、今はいづくへか遁るべき。人手に掛らんよりは、自害をせばやと思はれけるが、憎しと思ふ親の敵をば討ちつ。今はいかにしても命を全うして、君の御用にも立ち、父の素意をも達したらんこそ、忠臣、孝子の義にてもあらんずれ。若しや

佛神擁護の眸をや廻らされけん

と一先づ落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛越えんとしけるが、幅二丈、深さ一丈に餘りたる堀なれば、越ゆべきやうもなかりけり。さらばこれを橋にして渡らんよと思ひて、堀の上に末靡きたる吳竹の梢へさら〳〵と登りたれば、竹の末堀の向ふに靡き伏して、やすやすと堀をば越えてけり。夜は未た深し、湊の方へ行きて、船に乘つてこそ陸へは著かめと思ひて、たどる〳〵浦の方へ行く程に、夜もはや次第に明放れて、忍ぶべき路もなければ、身を隱さんとて日を暮し、麻や蓬の生茂りたる中に隱れゐたれば、追手どもと思しき者ども、百四五十騎馳散つて、「若し十二三許なる兒や通りつる」と、路に行會ふ人毎に問ふ音してぞ過行きける。

阿新その日は麻の中にて日を暮し、夜になれば湊へと志して、其所とも知らず行く程に、孝行の志を感じて、佛神擁護の眸をや廻らされけん、年老いたる山伏一人行會ひたり。この兒の有樣を見てい

かはゆき目

便船申さん

聲を帆に上ぐ

たはしくや思ひけん、「これはいづくよりいづくをさして御渡り候ぞ」と問ひければ、阿新事の樣をありのまゝにぞ語りける。山伏これを聞いて、我この人を助けずば、只今の程にかはゆき目を見るべしと思ひければ、「御心安く思し召され候へ。湊に商人船ども多く候へば、乘せ奉りて越後、越中の方まで送りつけ參らすべし」と言ひて、足たゆめばこの兒を肩に乘せ背に負うて、程なく湊にぞ行著きける。

夜明けて、便船やあると尋ねけるに、をりふし湊の内に船一艘もなかりけり。いかゞせんと求むる所に、遙かの沖に乘りうかべたる大船、順風になりぬと悅びて、檣を立て、とまを捲く。山伏手を擧げて、「その船これへ寄せてたび給へ、便船申さん」と呼ばはりけれども、曾て耳にも聞入れず、船人聲を帆に上げて、湊の外へ漕出す。山伏大きに腹を立て、柿の衣の露を結んで肩にかけ、沖行く船へ立向つて、いらたか珠數をさら〳〵と押揉みて、『一持祕密咒、生々而加護、奉仕修

肝膽を碎く

行者、猶如薄伽梵』といへり。況や多年の勤行に於てをや。明王の本誓誤らずば、權現、金剛童子、天龍夜叉、八大龍王、その船此方へ漕返してたばせ給へ」と、跳り上り〳〵、肝膽を碎いてぞ祈りける。行者の祈神に通じて、明王擁護やし給ひけん、沖の方より俄に惡風吹來つて、その船忽ちに覆らんとしける間、船人どもあわてゝ、「山伏の御坊先づ我等を御助け候へ」と、手を合せ膝を屈め、手に〳〵船を漕戻す。汀近くなりければ、船頭船より飛びおりて、兒を肩に乘せ、山伏の手を引いて、屋形の内に入りたれば、風はまた元の如くになほりて、船は湊を出でにけり。

阿新（伊勢寛一筆）

(一)越後の國府。今の新潟縣中頸城郡直江津町の近くにあつた。

鰐の口の死

(二)第九十六代後醍醐天皇。

卿相雲客

(三)藤原藤房。

(四)藤原季房。藤房の弟。

その後、追手ども百四五十騎馳來り、遠淺に馬を控へて、「あの船とまれ」と招けども、船人これを見ぬ由にて、順風に帆を上げたれば、船はその日の暮程に、越後の府にぞ著きにける。阿新山伏に助けられて、鰐の口の死を遁れしも、明王加護の御誓、いちじるしかりけるしるしなり。

——太平記——

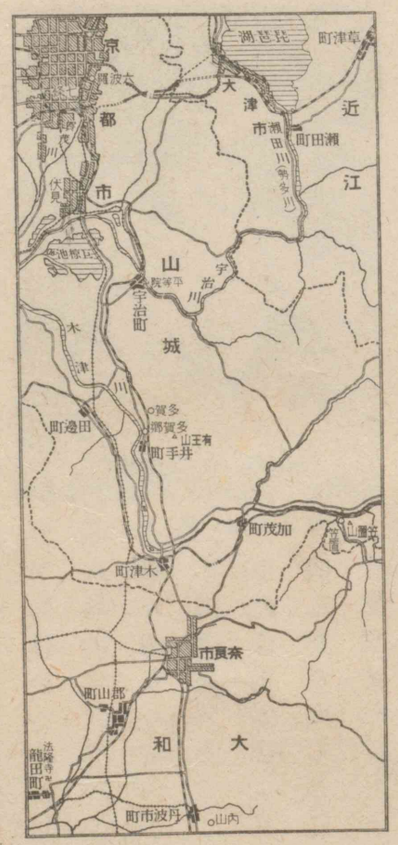
九　松の下露

さる程に類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上をはじめ參らせて、宮々卿相雲客皆徒跣なる體にて、何所を指すともなく、足にまかせて落行き給ふ。この人々初め一二町が程こそ、主上を扶け參らせて、前後に御供をも申されたりけれ、風雨烈しく路暗うして、敵のときの聲此所彼所に聞えければ、次第に別れ〳〵になりて、後には唯藤房、季房二人より外は、主上の御手を引き參らす

十善の天子田夫野人

夢地をたどる心地

る人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひて、其所とも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有樣こそあさましけれ。いかにもして夜のうちに赤阪の城へと御心ばかりを盡されけれども、假にも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ちどまり、晝は路の傍なる青塚の蔭に御身を隱させ給ひて、寒草のおろそかなるを御座の縟とし、夜は人も通はぬ野原の露分けまよはせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへず。とかくし



(一)京都府(山城國)綴喜郡多賀村と同郡井出町との境。

現の夢に臥す

て夜晝三日に、山城の多賀郷なる有王山の麓まで落ちさせ給ひてけり。

藤房も、季房も、三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ、身疲れて、今はいかなる目に遭ふとも、逃れぬべき心地せざりければ、せん方なくて幽谷の岩を枕にて、君臣、兄弟諸共に、現の夢に臥し給ふ。梢を拂ふ松の風を、雨の降るかと聞し召して、木の蔭に立寄らせ給ひたるに、下露のはらはらと御袖にかゝりけるを、主上御覽ぜられて、

松の下露（林雲鳳筆）

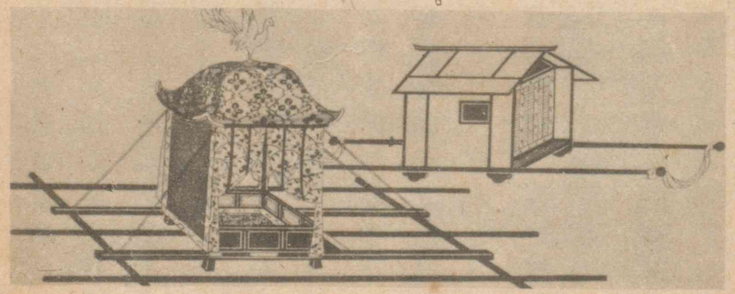
さして行く笠置の山を出でしより
あめがしたにはかくれがもなし

もだしけるこそうたてけれ

藤房卿涙を抑へて、

いかにせん賴む蔭とて立寄れば
なほ袖ぬらす松のしたつゆ

山城國の住人深須入道、松井藏人二人は、この邊の案内者なりければ、山々峯々殘る所なく搜しける間、皇居隱れなく尋ね出され給ふ。主上誠におそろしげなる御氣色にて、「汝等心ある者ならば、天恩を戴いて私の榮華を期せよ」と仰せられければ、さしもの深須入道俄に心變じて、あはれこの君を隱し奉りて、義兵を擧げばやと思ひけれども、あとに續ける松井が所存知り難かりける間、事のもれ易くして道の成り難からん事をはかつて、もだしける



張輿鳳輦

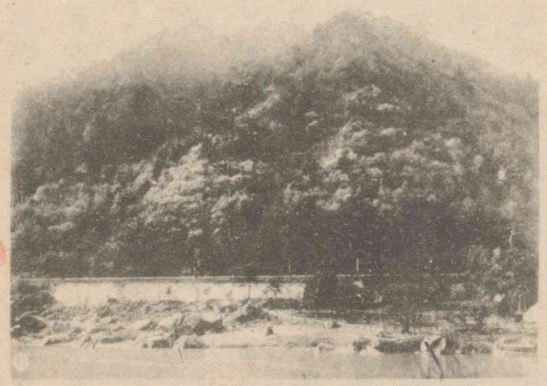
こそうたてけれ。俄の事にて網代の輿だになかりければ、張輿の怪しげなるに扶け乘せ參らせて、先づ南都の內山(一)に入れ奉る。その體、唯殷湯夏臺(二)に囚はれ、越王會稽(三)に降ぜし昔の夢に異ならず。これを聞きこれを見る人毎に、袖をぬらさずといふ事なかりけり。

この時此所彼所にて生捕られ給ひける人々都合六十一人、その所從眷屬どもに至るまでは數ふるに遑あらず。或は籠、輿に召させられ、或は傳馬に乘せられて、白晝に京都に入り給ひければ、その方ざまかと覺ゆる男女街に立ちならびて、人目をも憚らず泣悲しむ。あさましかりし有樣なり。

十月二日、六波羅(五)の北方常葉(ときは)駿河守範貞、三千餘騎にて途を警護仕つて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。その日、關東の兩大將(六)京には入らずして、すぐに宇治へ參り向ひて龍顏に謁し奉り、先づ三種の神器を渡し給はりて、持明院(七)新院へ參らすべき由を奏聞す。主上、

(一)今奈良縣山邊郡朝和村大字柚ノ內の稱。
(二)殷の湯王が夏の桀王に夏臺といふ牢獄に投ぜられた事を指す。
(三)句踐。
(四)今の支那浙江省紹興縣にある山。
(五)京都賀茂川の東で五條と六條との間。北條氏が探題を置いた所。
(六)大佛貞直と金澤貞將との二人。
(七)光嚴院。

藤房を以て仰せ出されけるは、三種の神器は古へより繼體の君、位を天に受けさせ給ふ時、自らこれを授け奉る物なり。四海に威を振ふ逆臣あつて、暫く天下を掌に握る者ありと雖も、未だこの三種の重器を自ら擅にして、新帝に渡し奉る例を聞かず。その上、內侍所をば笠置の本堂に棄置き奉りしかば、定めて戰場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時木の枝に懸け置きしかば、終にはよも我が國の守とならせ給はぬ事あらじ。寶劍は武家の輩若し天罰を顧ずして玉體に近づき奉る事あらば、自らその刃に伏させ給はん爲に、暫くも御身を放たるゝ事ある



笠置山

まじきなり」と仰せられければ、東使兩人も六波羅も、詞なくして退出す

翌日龍駕を廻らして六波羅へ成し參らせんとしけるを、さきざき臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を、强ひて仰せ出されける間、力なく鳳輦を用意し、衮衣を調進しける間、三日まで平等院に御逗留あつてぞ、六波羅へは入らせ給ひける。日來の行幸に事變りて、鳳輦は數萬の武士にうち圍まれ、月卿雲客は怪しげなる籠、輿、傳馬に扶け乘せられて、七條を東へ河原を上つて、六波羅へと急がせ給へば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲しいかな、昨日は紫宸北極の高きに坐して、百司禮儀の裝をつくろひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦の嚴しきに御心を惱ませらる。時移り事去り、樂しみ盡きて悲しみ來る。天上の五衰、人間の一炊、唯夢かとのみぞ覺ゆる。

——太平記——

衮衣

天上の五衰人間の一炊

一〇　工業の戰爭

秋山眞之[一]

最近の歐洲大戰の實況を視ると、海戰はもとより、陸戰でも、機械の力が七分通り働き、人間の力の働は殘りの三分くらゐなもので、寧ろ人間が機械に使役されてゐるかの觀があつた。

海戰の要素が主として機力である事は、今更言ふまでもない事で、砲熕、水雷、探照燈などが既に機械であるばかりでなく、これを裝備する軍艦、驅逐艦、潛水艦その物がまた大きな意味での兵器で、動くにも、走るにも、攻めるにも、防ぐにも、一として機力によらぬ事はなく、その相對抗する戰鬪距離も、今日は最早十海里以上に延長し、例へば、一方は東京[二]、他方は横濱に足場を構へて相戰つてゐるやうなものであるから、直接に肉眼で敵の艦影を認め難く、唯機械の力で敵の位置や距離を測定し、機械的に大砲や水雷を發射して戰つ

(一) 海軍中將。松山市の人。日本海海戰に聯合艦隊の參謀として功があつた。大正五年歿、年五十一。

(二) 東京と横濱との距離は約三十キロメートル。

てゐると、潛水艦が水中から間近く潛つて來て、不意打を食はせるといふやうな有樣である。隨つて、晴の戰場では、甲板上の勇士は稍張合のない譯であるが、これが人智の發達に伴なふ事物の進化であるから、致し方がない。

陸戰の方も、今日は海戰同樣に、機力に變化するやうになつた。小銃や野砲は勿論、機關銃、野戰重砲、榴彈砲、塹壕砲のやうな直接の破壞兵器が皆機械であるばかりか、塹壕を掘る開鑿機も、地雷の坑道を穿つ鑿岩機もまた機械で、その開鑿機も今は一時間に三マイルも掘れる物が出來たさうだ。故に鐵條網で固めた十數線の塹壕を、無數の重砲彈で地均ししながら攻擊前進する間に、はやその前に新塹壕を設けて防禦されるのであるから、敵、身方共に攻擊のはかどらないのも無理はない。

また戰線附近の軍隊輸送、その他、重砲や糧秣などの運搬は、大部分は自動車の機力によるもので、これがなくては、歐洲大戰のやうな大陸戰をする事は出來ない。ドイツ軍が當初破竹の勢で(一)ベルギーからフランスに侵入し、パリも危くなつた時、パリの防禦軍は數萬の徵發自動車に分乘して、ドイツ軍の右翼に迂回し、その側背を脅威攻擊した。これが功を奏して、かの(二)マルヌの勝利となつて、遂に敵軍を擊退する事が出來たのであるが、若し當時パリに徵發する事の出來る自動車がなかつたならば、佛軍のこの作戰は出來なかつた譯である。またドイツ軍が約八箇月間數十萬の犧牲を供して奪取に執著した(三)ベルダン要塞が、遂に能く持ちこたへたのも、一つは自動車の功である。當時ベルダンに通ずる二線の鐵道は破壞され、佛軍の增援、軍需の補給などは、悉く後方十數マイルの一村落から差立てた一萬有餘の自動車によつたものである。

それから、敵情偵察や彈著觀察や、更に進んで空中爆擊になくて

(一)白耳義。西紀一九一四年フランスに宣戰し、ベルギーの永世中立を無視して侵入したこれを蹂躙したフランス。

(二)フランスの河。英佛聯合軍を追擊したパリに迫つたが、佛將ジョフフルの率ゐる聯合軍とマルヌ河畔に大會戰し、阻止された。

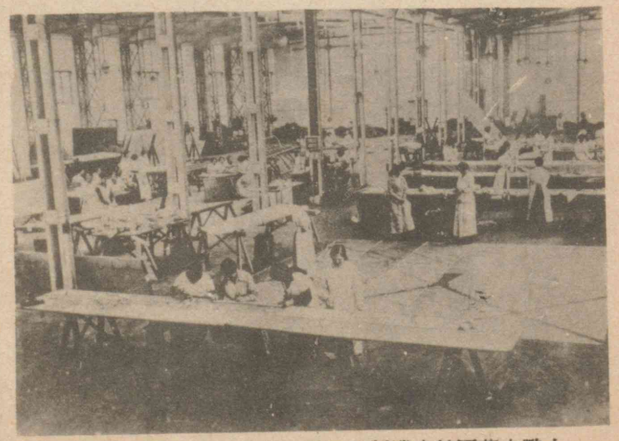
(三)ミューズ河岸にあつた堅固な要塞。西紀一九一六年フランスは一九一四年ドイツに破壞され、ベルダンの中心線を突破して要塞に集中し、激烈無比の攻擊を加へたが、遂に目的を達しなかつた。

(一)戰車。
(二)ドレッドノート型の戰艦。ドレッドノースはイギリスが日露海戰の經驗に徵し、西紀一九〇六年造つた大艦巨砲主義の戰艦。

はならぬ飛行機も、やはりその全體が機械である。佛軍の强かつたのも、一つはその優秀な飛行機で能く敵情を知り、且重砲の效果を發揮する事が出來たからである。その他、英軍が初めて戰場に持出してドイツ軍に一驚を喫しさせたタンク(一)も、全く機械の應用であつて、英人がこれを陸上の弩級戰艦(二)と稱してゐるのも當然である。

かやうに、海陸軍の戰鬪力の出所を穿鑿してみると、大部分は機械である。それ故、今日の戰爭は機械の戰爭であると言へる。またその機械を運轉してゐる原動力から言ふと、石油の戰爭である。これ等の機械は皆內地工業の產出したものであるから、この點から見ると、また工業の戰爭と言はねばならぬ。そしてその工業は人間の營んでゐるものであるから、結局はやはり人力の戰爭となるのであるが、從前のやうに戰場に立つて外で働くばかりでなく、內で兵器や彈藥などを送り出す者が、却つて重要な間接の戰鬪員になるのである。

歐洲大戰中に於ける英佛諸國の實狀を見ると、十七八歲から五十七八歲までの男子は、大抵國民兵となつて出征し、各軍需工場で男子が不足すると、數多の女子がこれに代つて隨分烈しい力業をなし、老人や子供はその製作品、の荷造や積出をしたのである。卽ち女房や娘の造つた彈藥で、その亭主や兄が敵と戰爭するのである。今日は戰爭までが夫婦親子の共稼となり、敵に對して間接直接の相違はあるが、眞正の國民皆兵主義が自然に實現されるやうになつた。



大戰中英國航空機製造工場に於ける婦人職工の活動

我が國も他日かやうな戰禍に遭遇したならば、やはりこの通りに、男女老幼を問はず、擧國皆兵で事に當るより外はない。然るに現在のやうな工業の程度では、人間はあつても道具がそろはず、人口九千萬のうち、大半は戰爭の役に立たないで、唯餘計な心配をして見てゐるだけであらう。英國のやうに民間の工業があの通り發達してゐる國で、出來るだけの工業動員を行つてさへ尙不足を感じて、新規に增築や擴張を斷行し、戰前の工業力の三四倍にもしたくらゐである。このやうな大規模の戰爭に對して、我が國の官立陸海軍の工廠だけでは、尙その軍需の十分の一くらゐを充すに過ぎないのである。多少平時からの準備があつたとしても、これで十分といふまでには、まだ相當距離がある。自分はこの點から見て、切實に我が民間工業の發達を希望して止まないのである。——軍談——

自修文

自動車王の印象

澤田謙[一]

フォードの自動車工場はデトロイト[二]市の町はづれ、ウードワード通にある。其所で働いてゐる人數が合せて二萬五千。そのうちで、何を措いても會ひたいと思ふ人が、たつた一人ある。言ふまでもなくヘンリ・フォードだ。それから、どんなに遣繰しても會ひたくない人が一人ある。フォードの祕書のリーボルド君。人をフォードに會はせない事を、一生の事業としてゐる人物だ。

「リーボルドにつかまつたが最後、君は一生フォードに會へないぞ。」

と、紹介狀をくれたニューヨーク[三]・タイムズの經濟記者M君は言つた。フォードに會ふ事よりも、リーボルドに會はない事の方が難事業なのだ。

私もリーボルドにつかまつた因果で、散々工場見學に引つ張り廻された擧句、危く玄關前で突つ放される所であつた。と、其所

(一)評論家、傳記作家。明治二十七年(二五四年)鳥取縣に生れた。
(二)アメリカのミシガン州南東部の工業都市。
遣繰する　色々にして都合をつける。
祕書　機密の事務を掌る者。
(三)ニューヨークにある代表的日刊新聞。
因果　むくい。

に勢よく停つた自動車からおりたつた男こそ、ヘンリ・フォードではないか。

私は矢庭に驅寄つた。そして彼の口から

「明日の朝九時、事務所で」

といふ答を受取つた。

翌朝、私の自動車が工場の門を潜つたのは、九時五分前であつた。にも拘らず、事務員はちやんと席に著いて、ペンを持つたまゝ時計が九時を報ずるのを待つてゐる。二萬の職工は各部署に著いて、やがて汽罐がたぎり、機械が動き出すのを待構へてゐる。すべての者がその日の勞役の準備に緊張してゐた。

車から飛びおりた私は、急いで廣い應接室を驅拔けた。其所にはは、七八人の面會人が詰掛けてゐた。

「成程これだな、フォードのポケットから六千二百五十ドルを捲上げる連中は」

(一)扉の把手。
立ちすくむ　立つたまゝでおそれちゞむ。
仰山に　おほげさに。
(二)サラセン模樣　は幾何學的圖案で一種の花模樣を織出し、且濃厚な色彩を用ひる。サラセンは中世に回教を奉じたアラビヤ人の稱。

と、私は苦笑した。M君の說によると、フォードの一箇月に儲ける金額は百五十萬ドル、卽ち一日にして五萬ドル。これを一時間に直せば六千二百五十ドルの勘定になるのださうだ。

「だからさ、百萬ドルの寄附金の勸誘に來る者や、六千二百五十ドルの値ある時間を盜みに來る連中を避ける爲に、事務所にはフォード專用の裏梯子が用意してあるのだよ」

と、M君は言つた。それをふと思ひ出したのだ。

こつ〳〵と私は社長室の扉を叩いた。返事がない。また叩いた。返事はない。思ひ切つてノッブ(一)を廻してみると、扉は苦もなく明いた。そして私は思はず、その開かれた室の前に立ちすくんだ。

それは廣い部屋であつた。仰山に言へば、部屋の隅から隅に歩くのは一つの仕事だ。私は危い足取で歩いてみた。足の下には、柔かい絨毯が一面に敷詰めてある。赤と綠とのサラセン(二)模樣が、眼に痛いばかりに東洋的な香味を反射する。

金に飽して云云　思ふ存分に金を使つて、おごりをきはめる。

簡素の壓卷　簡素の中でも特に著しく簡素なもの意。壓卷は卷中で最も價値のある傑作をいふ。

配當する　わりあてくばる。

それが、金に飽して贅を盡した室である事は、落著いて見れば了解出來ない事もない。にも拘らず、扉を明けた時の感じは「簡素」の二字であつた。その簡素の壓卷として大きな事務机がある。フォードがその前に坐るのであらう。

「あなたの御事業の話が承りたいもので」

と、間もなく現れたフォードに私は取敢へず尋ねてみた。彼は快く事業經營の話をしてくれた。

ヘンリー・フォード

「私どもの利益は一億三千萬ドルくらゐに上つてゐます。うち二割五分は、工場と事業との方に注ぎこみました。初め事業を起した時の資本は二萬五千ドルで、あとは全部利益金を積立てたのです。私どもの會社では、その利益を、事務員や職工に配當する仕組になつて居りまして……」

つち（槌）

利潤　まうけ。利益。

商談　商賣上のはなし。

私の打つたつちは、見事に的を外れた。それで十分だ。フォードが工場内に利潤分配制度を布き、年に何百萬ドルといふ金を從業員に配當してゐる事は、本で讀んだ事がある。それにフォードは、商談でもするやうな平明な調子でそれを物語るのだ。何の感興もない。

それで私は何心なく口走つた、

「あなたのこのすばらしい成功は、何に原因してゐるのでせう。」

と、彼は不意に立上つた。そして、あつけに取られた私を其所に殘したまゝ、片隅にある戸棚の前に立つたと思ふと、一つの小さな銀器をつかみ出した。

「これがそれです。」

とんとその銀器を机の上に置いた。

それは小さなフォード車の模型であつた。手に取つて見よと言ふから、つく〴〵見ると、(一)シリンダーからノッブの末に至るまで、寸

(一)氣筒。機關で復運動する圓形の盤（往ピストンの裝置してある圓筒部。蒸氣、ガス等の壓力を用ひさせて往復運動をさせる容器。

原型　製作物のもとのかた。
(一)捲線。
精彩を帶びる　ひかりを帶びる、即ちいきいきとする。
生きたフォード　はつらつとして活氣のある人間フォードの意。

分たがはぬ精巧な模型である。

「實に立派な模型ですね。」

お追從でなく、私がその模型を賞めると、彼の言葉は意外であつた。

「それは模型ぢやない。原型だ。このたつた一つの原型が、私のすべての成功の源泉なのだ。これ、このコイル(一)を見よ。今工場では、これと寸分ちがはぬ品が、一分間いくつといふ勢で出來てゐる。このスウィッチを見よ。わしはこの事務室で話をしてゐても、工場では絶間なしにフォードが製造されてゐる。これがあるからだ。これは生きてゐるんだ。そしてこの原型は、わしがこしらへたんだからなあ。」

フォードの言葉はだん〳〵精彩を帶びて來る。と同時に、言葉づかひがぞんざいになつて來る。そして彼が「わしが」と言ふたびに、生きたフォードが飛出して來る。

資金　資本金。元手。
哄笑する　おほ聲で笑ふ。
單調　變化のないこと。

「この間も靴屋が來たさ。資金を出してくれつてね。わしは言つたよ。『わしは靴屋ぢやない。自動車屋だ。靴屋は靴で儲けろ。何故お前は、誰でも履きたいと思ふやうな靴をこしらへないんだ。それが一つ出來たら、いくらでも同じ物を造れ。さうすれば、お前は見る間に金持になる。何だつて同じ事だ。萬人が萬人これはと思ふやうな原型をこしらへて、それから原型通りの品を供給すれば、成功疑なしさ。』――つて言つてやつたらね、奴さん、恐縮して行つてしまつたよ。」

そしてフォードは、びつくりするやうな大聲であはゝと哄笑した。その時私は始めて、生きたフォードと話してゐる氣がした。

しかし私が、その哄笑の前に立ちすくんだのは、そればかりではない。其所にフォードを發見したばかりでなく、同時にアメリカを發見したと思つたからである。

アメリカ生活の特色の一つは、その「單調」さである。

(一)ニューヨーク市の一區。
(二)ニューヨーク市の主要な商業地區。
外客　他地方から來た人。
目まぐるしさ　目ざはりになつてうるさいこと。
神經纖維　神經細胞の特殊な突起で、線狀をなし末梢の器官に至つてゐる。此所では單に神經と同じ意味。
ひし〳〵　きびしく迫つて來るさま。
寂寥　さびしいこと。ものさびしさ。
爪牙を現す　爪と牙とを出す、即ち本性を出して襲ひかゝる意。
徵候　きざし。しるし。

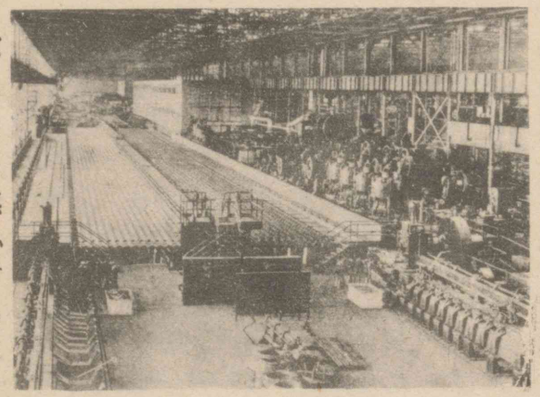
(一)マンハッタン南端の事務所街や、夜の(二)ブロードウェイに拋り出された外客は、誰でもが先づその忙しさに、賑やかさに、そして目まぐるしさに驚かされる。あとからあとからと、詰掛けて來る刺戟が、いかにもその生活を、複雜であるかの如くに感じさせる。しかし、さうして神經纖維をへと〳〵に疲らされた後に、ひし〳〵と身に迫るのは、怖るべき寂寥である。

それはアメリカ生活の單調が、そろ〳〵爪牙を現して來る徵候だ。

ホテルには必ず枕元に電話が置いてある。そして姿見の机の上にはきつと聖書がある。それが、どのホテルに泊つても同じ事だ。しまひには、それがむやみに癪にさはつて來る。街に出て見ると、四辻には必ず角に煙草屋がある。煙草屋がないと思へば藥種屋がある。それがどこまで行つても同じ店構、同じ裝飾だ。しかもアメリカ中、全く同じなんだから堪らない。

地下鐵　地下鐵道のこと。地下に通路を穿つて敷いた鐵道。
千篇一律　多くの物が盡く同一の調子で少しの變化もないこと。
直線的　單調で少しも變化のないことを言ふ。

夜が明けると必ず日の出る事までが、アメリカでは癪にさはる。朝七時に起きて、同じ食卓で同じ朝飯を取つて、同じ時刻に地下鐵に乘つて、四角な部屋の四角な卓子の前に坐る。時計を見ると必ず九時五分前だ。そして千篇一律の仕事を終へて、また同じ時刻を一分もちがへずに家に歸る。それは恐しく直線的だ。私はニューヨークの街で、四角でない物を、どれ程探して歩いたらう。街路も、建物も、店飾までが盡く直線的だ。よくかう飽きずに直線ばかり見て生きてゐられるものだと、つく〳〵感心するよりも、寧ろあきれる。



フォードの工場の一部

單調。——それがアメリカ生活である。そして「單調」とは「一つの

フォードの成功は云々　單一な原型の自動車を製造してフォードが成功したといふ事は、即ちアメリカそのものが單調である事を如實に示すものだといふ意。

にこ〳〵がすり（絣）　木綿の染がすりの一種。

原型」といふ事だ。その意味で、フォードの成功は、アメリカその物である。

「フォードが靴屋でなくて、まあよかつた」と私は思ふ。若し彼が靴屋であつたら、アメリカ人は今頃は同じ革でこしらへた、同じ型の靴を、いつまでも履かされてゐる事だらう。實際アメリカ人は、履きかねまじき國民である。

だからフォードが、「これがそれです」と言つて、机の上に置いた銀の「原型」こそは、アメリカその物だつたのだ。

私はその時思つた、

「若しこれが日本だつたらどうだらう」

若しこれが日本だつたら、さううまくは行くまい。金もない癖に、下駄の角の圓みにまで贅澤を言ふ國民である。鼻緒の色にも、赤から黑までその種類に限りはない。それに小さな模樣をつけて、いゝがらの鼻緒だと獨りで喜んでゐる。にこ〳〵がすり一反

均一化すべく云々　日本人は元來非常に藝術的に出來てゐるので、すべての人が同型同種の物品を用ひる事は滿足しないといつたくらゐの意。

買ふにも、がらがどうのかうのと文句を言ふ國民である。裏長屋の緣側に、ひねくれた松の盆栽を並べて置く國民である。「これがさうです」では、さう簡單には行くまい。

私が辭し去らうとすると、フォードは私の肩をつかまへて尋ねた、

「日本の工業はどんな工合かね」

「日本人は完全に均一化すべく、餘りに藝術的らしいですよ」

私は成るべく大股に、その廣い部屋を横切つた。扉の所で振返つて見ると、フォードははや受話器を耳に當てゝゐた。

チョッキのポケットから時計を出して見た。丁度九時二十二分である。

「すると、二千二百九十一ドル六十六セントだけフォードと話して來た譯だな」

自動車の中で、一時間六千二百五十ドルに値するといふ彼の

丹念に　根氣よくこまかに。

爲替相場　國際貿易及び貸借上の受取支拂勘定と振替へ勘定とを決算するに當つて、自國の貨幣額と他國の貨幣額との交換比率をいふ。

(一)第四十一代。

(二)歌人。丹後掾となつたので、人呼んで曾丹といつた。寛和(一一六六年)頃の人。

(三)平安時代の歌人。古今集撰者の一人。(一一六六年)歿。

時間を丹念に二十二分に割つてみた私は、さう口の中でつぶやいたものである。流石にそれを、當時の爲替相場で、日本の圓に引直してはみなかつたが。

一一　清水

春すぎて夏きたるらし白たへの
　ころもほしたり天の香具山

(一)持統天皇

花ちりし庭の木の間も茂りあひて
　あまてる月のかげぞまれなる

(二)曾根好忠

なつの夜のふすかとすれば杜鵑
　なつの夜のふすかとすれば杜鵑

(三)紀貫之

ふくからにあきのくさきのしをるれば　むべやまかぜをあらしといふらむ

(一)平安時代の武將歌人。治承四年(一一八四年)平家を滅さうとして敗死した、年七十七。

夏日
渡乃原豐榮
登朝日子能
御影怒支六
月迺空
眞淵

鳴く一聲にあくるしのゝめ

源頼政

庭の面はまだかわかぬに夕立の
　そらさりげなくすめる月かな

賀茂眞淵

大びえや小びえの雲のめぐりきて
　ゆふだちすなり粟津野の原

賀茂眞淵

傳紀貫之筆蹟

賀茂眞淵筆蹟

かぜそよぐならの小川の夕暮は　藤原家隆
　みそぎぞ夏のしるしなりける

松かげの岩井の水をむすびあげて　惠慶法師[1]
　夏なき年とおもひけるかな

みちのべの清水ながるゝ柳かげ　西行法師
　しばしとてこそ立ちとまりつれ

[1]歌僧。寛和頃の人。

かけひ（筧）

一二　田家の朝

農家はどこも早起である。一番雞が鳴くと、間もなく人々はもう目を覺す。健康な眠から覺めた清々しい心に、かけひから落ちる水の音が快く響く。あたりはまだほの暗い。澄切つた水のやうな靜けさが、外の世界に漂うてゐるやうな氣がする。しかもそれは生きとし生ける物が、全身に力を漲らせて、今にも動き出さうとしてゐる瞬間の靜けさである。

やがてその靜けさの底から、いち速く草刈に行く人に引かれた馬の鈴音が聞える。若い朗らかな唄聲も聞える。

路の草人に蹈まれて一度は枯れて、
　露の情でよみがへる。

唄の文句にも、歌ふ人の聲にも、いかにも朝らしい爽かさが感じられる。

健かに野に働き得る人々は幸福である。曉の光は先づそれ等の人々を照すであらう。

われ曉の野に立つ。

刈草　不識百穂筆

輝く彩雲。
碧瑠璃の大空。
綠したゝる丘。
光を歡ぶ鳥の聲々。
あゝ、われ天地と共に目覺め、
朝風と共に呼吸す
この時我が全身に充ち溢るゝ健康と力。
この時我が全靈に漲る大自然の精氣。
こゝに我が一日の初あり。
こゝに我が生の黎明あり。
かくしてわれ日々に新たなり。
かう或詩人は歌つたが、誠にさうした爽かな氣持は、何物にも替難い貴さをもつてゐる。

生の黎明

(一)相馬御風。

朝の草刈は多くは若い人々の仕事とされてゐる。男は言ふまでもなく、女も若い間は毎朝草刈に出なければならぬ。刈つて來た草は馬や牛の飼料になるのである。しつとりと露にぬれた山の草には、美しい色の花を咲かせたまゝのも交つてゐる。

草刈から戻つて來た若い人々は、刈つて來た草を庭にひろげ、馬や牛を小屋に入れて飼葉をやる。それから自分たちは前の小川へ行つて、手足を洗つて家に入り、やがて朝餉の膳に向ふ。

若い人々が毎朝このやうにまだほの暗いうちから山へ行つて働いてゐる間、年老いた人々も家にあつて、朝餉のしたくをしたり、藁を打つたり、縄をなつたりして、働き續けてゐる。そしていゝ加減働き疲れてから、快い空腹を感じた一家中の人々がうちそろつて、樂しく朝の食事を取るのである。

快い空腹はどんな粗食にも美味を與へる。ものの味は物にのみ

山海の珍味
砂を嚙む

あるのではない。どんな山海の珍味でも、健康な食欲のない人には、砂を嚙むやうに感じられるであらう。これに反して、快く働き、快き飢を感じてゐる人々には、どんな粗末な食物でも、美味を伴なはない物はないであらう。農家の人々が朝の食事を喜ぶのも、いかにもと肯く事が出來る。

朝の食事が濟むと、今度は老若うちそろつて田や畑へ出て働く。その頃漸く太陽が山の上に昇るのが常である。人々の勞働には一段と活氣が加る。

朝はふたたびこゝにあり。
朝は我等と共にあり。
埋れよ眠、行けよ夢。
隠れよさらば小夜嵐。

いなゝく（嘶）

諸羽うちふる雞は、
咽喉（のんど）の笛を吹きならし、
今日の命のたゝかひの
よそほひせよと叫ぶかな。

野に出でよ、野に出でよ。
稲の穂は黄に實のりたり。
草鞋とく結へ。鎌も執れ。
風にいなゝく馬もやれ。

雲に鞭打つ空の日は
語らず、言はず、聲なきも、
人を勵ますその音は、

野山に谷にあふれたり。

流るゝ汗とあぶらとの
落つるやいづこ、かの野邊に、
名もなき賤のものゝふを、
來りて護れ軍神。

野に出でよ、野に出でよ。
稻の穗は黃に實のりたり。
草鞋とく結へ。鎌も執れ。
風にいなゝく馬もやれ。

あゝ綾絹につゝまれて、

なすよしもなく寢ぬるより、
薄きつゞれはまとふとも、
活きて起つこそをかしけれ。

口には朝の息を吹き、
骨には若き血をまとひ、
胸に驕慢、手に力、
霜葉をふみてとく來れ。

野に出でよ、野に出でよ。
稻の穗は黃に實のりたり。
草鞋とく結へ、鎌も執れ。
風にいなゝく馬もやれ。

(一)詩人、小說家。名は春樹。明治五年(一八七二年)長野縣に生れた。

と、(一)島崎藤村が「勞働」と題する詩の一節で歌つてゐるやうに、或は鎌を手に執り、或は鍬を肩にして田や畑へ出て行く農家の人々の朝の姿は、恰も戰場へ出て行く武人の雄姿の如く、誠に勇ましげに見える。

見渡す限り黃金色に實のつた秋の田に輝く朝日の美しさは言ふまでもないが、みづ〳〵しい綠の野を吹渡る朝風の快さもまた言ひやうがない。野に働く人々には、朝毎に新しい生氣が漲る。朝毎に新しい力が涌く。見方によつては、農家の人々は年々歲々同じ姿の自然の中に生き、歲々年々同じ働を繰返してゐるやうではあるが、決してさうではない。外見はどうであらうと、人々の心は日に日に新たに、年々に新たである。

秋の仕事が終つて、山も野も眞白な雪に蔽はれる冬が來ても、農家の人々は朝早く起きる事を止めない。雪に閉された家々からは、

(一)思想家、評論家。衆議院議員。明治十八年(一八八五年)岡山縣に生れた。

諧調

雞の聲と共に、いとものびやかな藁打つつちの音が聞えぬ朝はない。

田家の朝は、かくして春夏秋冬大自然の爽かな靜けさと、健かな人間の働との微妙な諧調を繰返してゐる。

一三　山河の美

鶴見祐輔(一)

見馴れては忘るゝともなく忘れてゐた祖國の優秀性が、太平洋から歸り來る遊子の胸にひし〳〵迫つて來ると、茲に新しき日本を發見し、日本人たる誇を自覺する。

或西洋の學者は論じて、民族の興亡はその居住する土地の氣候に因ると喝破した。誠に道理ある言葉である。餘りに暑い南國は天惠が饒か過ぎて人を懈怠ならしめ、餘りに寒い北國は風雪の威が强過ぎて人を萎縮せしめる。春夏秋冬の序の宜しきを得てゐる溫

喝破する

春夏秋冬の序

帶地にのみ文化と文明との起るといふのは、理の正に當然のところである。

日光

しかしながら私の近年痛切に感ずる事は、氣候と共に、風光がその民族の優劣に甚大な影響を及す事である。人間は鋭い官能をもつて生きて居る。我が五感を通して受ける外界の刺戟に、我々の內的生活の大部分は影響されて居る。その外界の刺戟のうちで、氣候と風光とぐらゐ我々人間を間斷なく支配して居る者はない。狂風土砂を捲く異變の宵には人の心は荒び、落花春風に飜る平和の朝には人の心も和かである。春は霞に匂ふ芳野

(一)イタリーの都會。風光の美を以て著れる。

(二)イタリー半島を縱走する山脈。延長一三〇〇餘キロメートル。

滿山の芳葩、秋は錦織成す晃山一帶の紅葉、誰人か日本の山河のうちに生きて、生を歡喜し、人を愛するの情なきを得るものぞ。日本民族の思想と生活と文化との一切は、かゝる豐潤な自然の賜である。

去年の秋、私は南歐イタリーの山河に彷徨ひ、初めてこの小さな半島のうちから數多き天才と英雄との群がり起つた理由を心讀した。天蓋の如き大空は、(一)ベニスの町の工人の磨く玻璃のやうに碧かつた。(二)アペナインの山々には橄欖の林が微風に波打ち、葡萄畑と小麥畑との續く平野の中には、白練を敷いたやうな流が光つて居た。所々に古城宮殿、さうして壯大な天主教

イタリー風景（マジョレ湖）

寺院、手の染るやうな藍色の海、そのすべての物象の上に惜しげもなく降りそゝぐ赤い日射し、かゝる氣候と風光との中から、シーザー[一]も出で、ダンテ[二]も生れ、ラファエロもはぐゝまれ、ガリレー[三]も現れたのだ。

個人も民族も運命から逃れる事は出來ない。太古の民族移動期に、偶然にも最も惠まれた自然に行當つた民族は幸運であつた。彼等の子孫はその土地に安住して、天地の恩澤に浴しつゝ、優秀な文化を築いて行つた。我々日本民族も幸運であつた。天は日光と雨とを惜しむところなくこの地に惠み、地は深き海を以てこの島々を外敵から防衛した。大氣は貿易風となつて四邊の海に迫る外船を追ひ、山と田と川と海とは、人草の求めるまゝに諸の食物を堆く盛り供へ、四時に亙つて飢ゑる事なからしめた。

外敵の脅威と生活の壓迫とから解放された日本民族は、日射し

(一)政治家。(西紀前一〇〇年—四四年)
(二)詩人。(西紀一二六五年—一三二一年)
(三)天文學者、物理學者。(西紀一五六四年—一六四二年)

松籟潮風の樂

百川海に朝す

暖かなるまゝに、戸外に出て最も健全な生活を營み得た。それがやがて日本建築となり、日本衣服となり、日本庭園となつた。かゝる溫雅な風俗を作り出した日本民族は、その眼に秀麗な山河の色を見、その耳に優雅な松籟潮風の樂を聽き、その肌に五月の薰風を浴び、その鼻に朧月夜の梅が香を嗅いだ。官能の生活に於て、かゝる惠まれた境地に住する者、世界の何れの地にかその比を求め得よう。天の日本民族を愛撫する、至れり盡せりと謂ふべきである。

かゝる自然の恩惠に浴した日本民族の心の底には、いつとしもなく强烈な愛鄕愛國の情操が芽生えた。それは單純な理念から生ずる政治意識でも、利害に基づく經濟觀念でも、個人的感情に胚胎する家族思想でもなかつた。實に百花の日に向つて開き、百川の海に朝するやうな自然さであつた。

我等の祖先は、この島のうちに住んで幸福であつた。彼等は花に

感受性の強い國民

歌ひ、朝日に祈つた。皮下に躍る血汐の中には、夕日に映える芙蓉の峯と、春雨に烟る嚴島の情調とが流れてゐたのだ。殊に島國の民の特色である鎖國といふ事が、我等の祖先の心をこの國土の中に集中凝結せしめた。唯この國を見、この同胞を見て、幾千年かの歳月を送り迎へるうちに、彼等は傍目もふらず、この國とこの民とを愛戀するやうになつた。永い時期を隔てゝをり〳〵渡來した異邦文化は、感受性の強いこの國民を驚かした。しかし、その異邦文化を一度己が國土に流入せしめると、彼等はまた水門を閉ぢて、この異邦文化を自己の固有文化のうちに溶解せしめる事に專心努力を續けた。かゝる外邦隔絶性と自己集中性とが、日本人を作り上げる爲の大きな惠であつたのだ。我々は氣の散らない民族生活を續ける暇があつたのだ。

惟ふに日本民族の運命は、我等の祖先がこの麗しい山河に占據した時に約束されて居たのである。我々の自然美に對する憧憬と、その憧憬の生んだ醇雅な性情と、國土に對する燃えるやうな愛著と、衣食住の煩ひの少かつた事から生じた理想主義的人生觀と、自然を客觀的に眺める習慣から生れた現實正視の態度と、現實正視の態度から來る利用厚生の思想とは、久しい間の鎖國生活のうちに鍛錬陶冶されて、玲瓏たる一個の寶玉と化したのである。かゝる不可思議にして特有な思想と性格とを有する日本民族は、今や新しい世界の黎明を前にして、驚くべき役割の爲に選み出されようとするのだ。

世界の黎明

それはいかなる役割であるか。

それは古典的有閑文化と、近代的多忙文化との調和だ。この二つの文化に統一を與へて、新たな文化を創造する事だ。

日の國日本は紺青の水の上に浮んで、その胸にひしと傳統文化

の寶石を抱きつゝ、今足を爪立てゝ機械文明の旋回を眺めてゐる。

——歐米大陸遊記——

一四　海と日本文學

幸田露伴[一]

我が邦は四圍皆海にして、繁華殷富なる都市は海岸線に多く、隨つて人口もまた、古來、海岸線に於て稠密なりし事疑ふべからず。されば邦人の生活には、直接間接に海と相離るべからざる關係を有する事少からず。隨つて、我が邦の文學も、またおのづから海と少からざる關係を有すべき理なり。例へば、潮來り汐去る面白さを詠じたる歌、または晴れたる日の親しむべく、風だてる日の怖るべき海原の樣を記せし文、或はまた浪のはてより上る日の麗しさ、島山のあなたに傾き落つる月の哀れさなどを寫せしもの、勇ましき舟子が上を傳へたる小說なんどは、我が邦の文學に多く現るべきはず

(一)文學者、帝國文學士院會員。文學博士。名は成行。慶應三年(一八六七)江戸に生れた。

ならずや。

然るに事實はいたくこれに反せり。和歌には海に關するもの甚だ少し。偶、これなきにあらずと雖も、多くは海を怖れ海を厭へるが如き思想を有するものにて、海國民の歌としてはふさはしからぬものとや言はん。誠に悲しげなるもののみなり。誠に古今集[一]以後の敕撰の歌集、または一家の歌集の類を手にして、漁夫、舟人の類を詠じたる歌をあらため見よ。その世渡の危きを悲しみ憐む意の痕を留めざるもの幾何かある。また萬里の海を我が路として、八方の風を驅役する舟人の意氣を詠じたる和歌、または千尋の波の底より呑舟の大魚を獲て、舷頭に獨り嘯く漁夫の感興を描ける章の如き幾何かある。和歌衰へて後の俳諧、發句は、新しき酒を盛れる小さき囊なり。されどこの囊の中にも、海に對する人の心を勵まし、勇ましむるに足るべき好き酒の盛られたる事は幾何もあらずして、却つ

(一)二十卷。延喜五年(一九〇五)紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑等が醍醐天皇の敕を奉じて撰進した歌集。

てせつかくの新しき嚢に、平安朝以來の海を怖るゝ古き思想の、譬へば腐りたる酒の如きものの盛られたる事少からぬやう見ゆ。小說は宇津保物語、(一)源氏物語(二)の昔より、海とだに言へば怖るべきものゝやうに描けるが多し。風に遇ひて船の破るゝ事、または思はぬ方へ吹流さるゝ事などは、古來の小說家の好みて描けるところなるが、その物語は大抵、机上にて作者が海に對する自己の恐怖心より捻り出したる曖昧無實のものたるに過ぎず、一も眞實らしき狀態を描きて、海上の光景を讀者に感知せしむるものなし。されば、それ等の物語は、徒にその讀者をして、海の怖るべき事を空想上に深く思ひ浸ましむる外には、何の結果をも遺す事なし。古來の小說少からずと雖も、海員の生活、船上の旅客の眞情等を書現せしものの如きは幾何かある。余は實にある一章にすら、海に關する記事の、稍矚目に値すべきものを含める小說の名を指し示す能はざるを悲し

(一)平安時代の物語。二十卷。作者不詳。
(二)平安時代の物語。五十四帖。作者は紫式部。

矚目に値す

まざるを得ず。謠曲然り、淨瑠璃もまた然り。作者が海に對する恐怖心の外には、海に關する記事中に於て見出し得べきものなしと言ふも不可なきに似たり。若し强ひてその外に何物をか尋ね得たらんには、そは海神、龍王等に對する迷信ならんのみ。かくの如く、和歌、俳句、小說、謠曲、淨瑠璃等と海との關係を考察するに、良好の狀態を呈し居らざるは、遺憾ながら我が邦文學の事實にして、いかにこれを辯護せんとすとも、何人もその辭なきに窮せざるを得ざるところなり。

かくの如く、我が邦と海との地理上の關係に、文學の相應せざる事甚だしけれども、これによつて直ちに我が邦の歌人、俳諧師、小說家、謠曲及び淨瑠璃の作者等を、思想偏僻なり、眼界狹小なり、伎倆拙惡なりと爲さんは餘りに酷にして、雅量に乏しき判斷となさゞるべからず。如何となれば、その邦の文學はその地理に相應して發達

繁榮すべきものなるのみならず、また實にその歷史に相應して發達繁榮するものなればなり。されば我が邦と海との地理上の關係を考察するが如く、我が邦と海との歷史上の關係をもまた考察せずんば、我が邦の文學を論ずるに於て、その判斷の中正を得ざるべきは言ふまでもなし。

然らば我が邦と海との歷史上の關係は如何。德川氏は大船を造る事を禁じ、海外諸國と交通する事を欲せざりき。陸上の交通、驛傳の諸法は甚だ整理せられたるに拘らず、海上の交通、舟運の利は甚だ輕視せられて、膽勇ある豪商等の經營の外には、政府も士人も殆ど指を海事に染めず、諸侯の參勤交替の如きも、皆必ず陸路を取りしが如きは、最近三百年の歷史なり。舟子が志州の鳥羽(一)より豆州の下田(二)に至る航路を以て、非常の難關と思惟し、旅客が中國諸港より讃州多度津に至る短距離の航海を以て、大冒險の如く恐怖し、一般

指を……に染む

(一)三重縣(志摩國)志摩郡鳥羽町。

(二)靜岡縣(伊豆國)賀茂郡下田町。

の人民が、大罪人と舟子との外は、海に航すべきにあらずと考へ、婦女子が海を以て龍神、海坊主、船幽靈等の巢窟と信じたりしは、德川氏が我が邦民をして壺中に遊樂せしめし政治の結果なり。かくの如き歷史上の狀態によりて考察する時は、我が邦の文學と海との關係は、地理上には相應せざれども、歷史とはよく相應吻合せりと言ふべし。

また德川氏以前に於ては、足利氏が京都に據りたる、桓武天皇が山城の山間に都を奠め給ひたる、なほその以前にありては、大和の地に都の奠められたるなども、著しく我が邦の文學をして海と相遠ざからしめたり。特に元祿以前の文學は、國民の文學と言はんよりは、寧ろ貴者の文學と言ふべきものなれば、その國都の海邊を離れし山間に置かれたりしは、都府の住者たる貴者をして海に遠ざからしめ、隨つて、また我が邦の文學をして海に遠ざかるに至らし

壺中に遊樂す

(一)第五十代。

(二)第百十三代東山天皇の御代。(二三四八年—二三六三年)

めし大原因なりと言ふべし。

かくの如くにして奈良、京都の文學者、即ち我が邦の文學の父たり母たる位置に立てる文學者よりして、海と言へば須磨[一]、明石[二]、若しくは紀州の海邊の外は知らざる如き知識感情を相承せしを以て、その兒孫たる文學者が、今に至るまで、我が邦の文學史を飾るに足るべき海に關する篇什を出ざゞるは、敢へて怪しむに足らずとや言はん。

都の大和にありし間遣唐使の存せし事は、萬葉集[三]をして、古今集よりも海に關する歌を聊か多く包含せしめたり。古今集を讀終り遡つて萬葉集を讀まば、この集の作者等が、かの集の作者等よりも海に親しかりし事は、何人もこれを認め得ん。これまた海に對しては、我が文學が我が歷史に相應せる一證なり。

萬葉集以前は載籍甚だ乏しければ、吾人をして精細確實なる斷

篇什

[一]神戸市須磨區の海岸。
[二]明石市の海岸。
[三]二十卷。撰者不詳。第十六代仁德天皇の御代から第四十七代淳仁天皇の御代まで收めの歌ばかりである。

案を下す能はざらしむれども、古今集を拋つて萬葉集に就けるが如くに、萬葉集を讀終つて古事記、日本紀[一]等に見えたる傳說、歌謠を見る時は、吾人は海國の民として、此所に一種の愉快を感ぜずんばあらず。それは我が邦上古の文學は、歷史上にも地理上にも能く相吻合して、我が祖先等が海に對する思想、感情及び知識の、決して萎縮的ならざりし事を知るを得べければなり。實に記紀には、海並びに船舶に關する記事の多き事、平安朝以來の書史には決してその比を見る能はざる程にして、これ明らかに我が本來の日本人、即ち歷史的の繫縛を被らざりし時代の邦人が、後世の邦人の海に對して畏怖心をのみ抱くが如くならざりし事を、明らかに證するものにあらずや。

我が邦の地理上の狀態は、我が邦の文學をして海に親しましむべき因を有す。然るに歷史上の狀態は、上世を除きては、我が邦の文

[一]日本書紀とも神代から持統天皇の十一年まで記したもの。三十卷。漢文の歷史。舍人親王、太安萬侶等が撰し、元正天皇の養老四年奉じた。（一八三〇年）

學をして海に遠ざからしむべき因を爲せし事上述の如し。かくの如くにして我が邦の文學は、海國の文學としては甚だ相應せざる狀態を有するに至れり。然れども、これ實に歷史上の關係の壓迫に因れる事上述の如くにして、邦人本來の性質は、海洋に對して怯懦なるにあらず、また古來の歌客、文人の思想の偏僻、眼界の狹小、伎倆の拙劣なるのみよりして、かくの如きに至れりと爲すべきにもあらざるは、歷史の繫縛を被らざりし時代の人の手に成れる記紀の中に、海に關する記事の多きに照して、極めて明らかなる事なりとす。海中に國を成せる我が邦の人にして呑海の氣象なくんば、いかで世界に雄を稱するを得ん。地理上の狀態は千古渝らず、歷史上の狀態は雲煙去來す。今や我が邦は、山間の狹き平地に安きを偷みしが如き昔時の愚をば二たびせず、また國を鎖し海を封ぜし近古の陋をば二たびせず、膽勇ある邦人は島內にのみ安居するに堪へず、

呑海の氣象

雲煙去來す

海に親しむ事は日に月に多くなり行くなり。海國の所產たるに相應する文學は、蓋し今日以後に成らん。

——露伴全集——

自修文

海洋文化國としての日本

內ケ崎作三郎(一)

嘗て日本は、世界の他の國々から、神祕の國、桃源の仙境として、一風變つた國と思はれて來た。それは言ふまでもなく、日本が海洋の眞直中に置かれた島國であつて、世界は愚か、近い朝鮮、支那に對してすらも、往來の不便な爲に頻繁に交通しなかつた結果として、日本獨得の國情、風俗、習慣が發達して居つたからである。

それも德川時代の二百數十年の間、鎖國生活をする事がなかつたならば、もう少し西洋に接近した國情になつたであらうが、鎖國斷行の結果は、室咲の梅のやうに、色も好く枝ぶりも面白いが、しかし、どことなく窮屈で不自然な趣を加へた事は、日本人自らも承認せねばならぬ。

(一)政治家、衆議院議員。早稻田大學講師。明治十年(一八七七年)宮城縣に生れた。

室咲　溫室で咲かせた花。

隔絶する　遠くかけはなれてゐる。

ヨーロッパの國々は、あの狹い土地に、幾多の國家が境を接して文化を競ふのであるから、自然、相互の間に連絡もあり、統一もついて、風俗、習慣、すべての國情が、大抵、似たり寄つたりの狀態にある。食物にしても、イギリス流の料理と、フランス風の料理と、ドイツ式の料理と、多少の違はあつても、大體に於ては同じである。

然るにアジヤとなると、土地が廣大で、山河が隔絶してゐる爲に交通不便で、文化の連絡も統一もなか〳〵むづかしい。それは、日本と朝鮮と支那との料理の相違の甚だしいのを見てもわかる。衣服の形から色彩の好みを見てもわかる。「紙の家」と言はれる日本の家と、溫突を持つ朝鮮の家とを見ればわかる。寢臺の上に眠り、靴のまゝで床の上を歩く支那人と、疊の上に坐る日本人とを見ればわかる。西洋の文明には統一はあるが變化がない。東洋のそれには統一はないが複雜な特色がある。

かう考へてみると、我が國の文化には、非常な特色のある事を

基因する　もとづく。

一目瞭然　一目見て明らかなこと。

暖流黑潮　フィリッピンに起り、北上して日本列島の近海に沿うて流れる海流。鹽分強く、濃藍色を呈し、溫度が高い。

寒流親潮　千島列島に沿うて南下する海流。溫度が低い。

思はなければならない。それが皆我が國の海洋國である事に基因するが故に、私はこの特色を名附けて、海洋文化と稱したいのである。或は島國文化と言つても差支ない。

地圖を披いて見れば、日本が海洋國である事は一目瞭然であるに拘らず、國民自らは、一向にそれを珍しいと思はず、足一たび大陸に蹈出してみて、始めて自國の海洋國である事に氣附くやうな次第である。それではならない。どうしても我が國民は自ら海洋國民である事を常に强く意識して、自らの特性を自覺し、自らをより良くする事に努力しなければならぬ。

海洋文化國の特色は、何と言つても氣候である。「我が國は氣候溫和にして、夏も凌ぎ難からず、冬も雖もさまで寒からず」とは、小學兒童も言ふところであるが、それは皆この島國の岸を洗ふ暖流黑潮と、寒流親潮との作用に外ならぬ。

海に浮んだ船のやうな我が日本は、常に水蒸氣に富んでゐる。

明媚　清く美しいこと。
山紫水明　山の色は紫に、水の色は明るいといふ意。
滾々　水の盛に流れるさま。
突飛　だしぬけに行ふこと。思ひきつた事をすること。
忍從　苦しみに堪へること。
(一)西班牙。

それが雨となり、雪となり、霞や霧や霜となる。「風光明媚」だの、「山紫水明」だのといふ我が國の自然の美は、全くその賜である事を知らねばならぬ。

雨が多い爲に、到る所井戸を穿てば清く冷たい眞清水が滾々として涌出する。清き水の供給される所、其所におのづから清潔を好む性情が養はれた。

日本人の氣象が感情的、神經質的であるのは、溫帶人の特徴であつて、イタリー人、(一)スペイン人、フランス人などと共通するところであるが、しかもそれ等の國民との間に著しい相違のあるのは、雨の影響に負ふところが多い。げに雨は色々人の性情を作る。殊に春雨といひ、梅雨といひ、秋雨といひ、數日、數週間に亙る雨天は、知らず識らずの間に、我が國民に忍耐性を與へた。一面突飛なやうで、一面忍從の精神があるのはこれが爲である。日本はまた風の國だ。太平洋から、日本海から、絶えず寒暖の風を吹送る。風は

明哲　はつきりして明らかなこと。
革新的精神　不適當なものはどん〳〵あらためていかうとする精神。
極端から極端へ走る　非常に突飛なことばかりする。
抛棄　すて〻しまふこと。
專制政治　國家の元首がほしいまゝに行ふ政治。
反動　はねかへり。
(一)露西亞。
保全　安全にたもち全うすること。

人の頭腦を明哲にし、思考力を發達せしめ、同時に心氣を爽快にして仕事の能率を高める。日本人が常に進歩的で革新的精神の旺盛なのは、これが爲である。

大陸はさうでない。寒さも極端なら、暑さも極端である。季節によつては殆ど雨が降らない。これが大陸人にどう影響するかは、問はずして明らかである。彼等は極端から極端へ走る。支那人は極端に惡人になると共に、また極端に善人になる。印度には貪慾な人間が非常に多い。その代りにはまた一切を抛棄した釋尊のやうな大人格もあるのである。これを政治的に考察すると、勝利者は極端な專制政治を行ひ、極端に苛酷な法令を布く。その代りに反動も烈しく、其所に必ず革命を伴なふのである。支那がさうだ。(一)ロシヤがさうだ。

大陸はまた國境の確定と保全とが頗る困難である。萬里の長城を築いたのは、遠い昔の支那の事とのみは思はれない。今日と

雖も、大戰前のドイツとロシヤの如き、またフランスとドイツの如き、その國境は長城ならぬ幾多の要塞堡壘を以て、實に物々しく固められたものである。

人間の造つた長城は遂に失敗に歸したが、天の作せる朝鮮海峽や東支那海は、アジヤ大陸の遠征軍に對して、萬里の長城に何百倍する大要害であつた。島國の日本は、國境の保全に於てかくの如く多く惠まれて來た。日本が肇國以來、國家として完全に獨立を保ち、文化史上獨得の發達を遂げ來つたのはこの故である。政治も穩健中正で極端に走らず、上下協調を維持して來たのも、この民性、國情の所爲であつて、要するに、海洋國たるが故に外ならぬ。かういふ國がらは、大陸では成立ちにくい。少くともロシヤや支那のやうな尨大な領土、茫漠たる大陸では出來ない事である。支那やロシヤを旅行した人が、一度日本に足を蹈入れるや、始めてほつと一息ついて安堵の思をするといふ。――それはかう

堡壘　要塞の小規模なもの。
物々しく　仰山らしく。おほげさに。
穩健中正　おだやかでしつかりしてをり、片よらず正しいこと。
上下協調　君と民とが心をあはせて圓滿に進んで行くこと。
尨大　ひろがつて大きなこと。
安堵の思　ほつとして安心する思。

した國がらによるものと言はねばなるまい。

海洋國の特色、惠まれた島國文化、それを我々は十分に自覺して、其所に日本の使命を認めねばならぬ。島國なるが故に國家として纏り易い。その上に、神代以來の國がらである。理想的の國民文化を作り出して世界の文化に貢獻し得る者、我々日本人を措いてそれ誰ぞや。これ日本國民の光榮ある義務であり、特權ではないか。日本の使命は實に此所にあるのではあるまいか。

一五　松葉仙人

河内國金剛寺(一)とかやいふ山寺に侍りける僧の、「松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども苦しみなし。よく食ひおほせつれば、仙人とも成りて飛びありく」と言ふ人ありけるを聞きて、松の葉を好み食ふ。誠に食ひやおほせたりけん、五穀の類食ひのきて、やう〳〵兩三年

貢獻する　力を盡して爲になる事をする。
(一)今大阪府南河内郡天野村。行基の開基。

そは

さけさま

に成りにけるに、げにも身も輕くなる心地しければ、弟子どもにも、「我は仙人になりなんとするなり」と常は言ひて、今々とて、内々にて身を飛習ひなどしけり。「既に飛びて登りなん」と言ひて、坊も何も弟子どもに分ち讓りて、「登りなば仙衣を著るべし」とて、かたの如く、腰に物をひとへ卷きて出立つに、「我が身にはこれより外はいるべき物なし」とて、年比祕藏して持ちたりける水瓶ばかりを腰に著けて、既に出でにけり。弟子、同朋、名殘を惜しみて悲しぶ。聞及ぶ人、遠近市の如くに集りて、「仙に登る人見ん」とてつどひたりけるに、この僧、片山のそはにさし出でたる巖の上に登りぬ。「一度に空へ昇りなんと思へども、先づ近く遊びて、事の樣人々に見せ奉らん」とて、「かの巖の上より、下に生ひたりける松の枝にゐて遊ばん」と言ひて、谷より生ひのぼりたる松の上、四五丈許ありけるに、さけさまに飛ぶ。人々目を澄し、袁れを浮べたるに、いかゞしつらん、心や臆したりけん、かね

とかくして

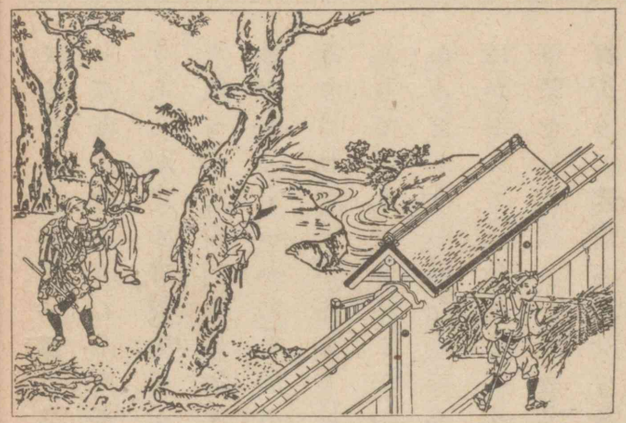
かゞまりゐたり

て思ひしよりも身重く、力うき〳〵として弱りにければ、飛びはづして、谷へ落入りぬ。人々あさましく見れども、「これ程の事なればやうあらん。定めて飛揚らんずらん」と見る程に、谷の底の巖に當りて、水瓶も割れ、我が身も散々に打損じて、唯死に死ぬれば、弟子、眷屬騷ぎ寄りて、「いかに」と問へば、いらへもせず、僅かに息の通ふばかりなりけれど、とかくして坊にかき入れつ。こゝに集れる人、笑ひのゝしりて歸りけり。さてこの僧、あるにもあらぬ樣にて痛み臥せり。とかく言ふばかりなくて、弟子も恥づかしながらあつかふ間、松の葉ばかりにては命生くべくも見えねば、年比いみじう食ひのきたる五穀をもて、樣々いたはり養へば、命ばかりは生くれども、足、手、腰も打折りて、起居もえせず。今は松の葉食ふには及ばず、本の如く五穀貪り食ひて、弟子どもにゆゝしく讓りたりし坊も實も取返して、かがまりゐたり。仙道に至る人、たやすからぬ事なり。――十訓抄――

一六　高名の木のぼり

吉田兼好[一]

(一)吉野朝時代の文學者、歌人。京都の人。正平五年(一三五〇)年寂、年六十九。



高名の木のぼり（繪本徒然草所載）

高名の木のぼり

高名の木のぼりといひし男、人をおきてゝ、高き木にのぼせて梢を伐らせしに、いと危く見えし程は言ふ事もなくて、おるゝ時に、軒たけばかりになりて、「過すな。心しておりよ。」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛びおるともおりなん。いかにかく言ふぞ。」と申し侍りしかば、「その事に候。目くるめき、枝危き程は、おのれが恐れ侍れば申さず。過は安き所になりて、必ず仕る事に候。」と言ふ。あやしき下臈なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠も難き所を蹴いだして後易く思へば、必ず落つと侍るやらん。

あやしき下臈

弓射る事

ある人弓射る事を習ふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師の曰く、「初心の人、二つの矢を持つ事なかれ。後の矢を頼みて、初の矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、このひと矢に定むべしと思へ。」と言ふ。僅かに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと思はんやゞけたいの心自ら知らずと雖も、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。道を學する人、夕べには旦あらん事を思ひ、旦には夕べあらん事を思ひて、重ねて懇に修せん事を期す。いはんや一刹那のうちに於て、けたいの心ある事を知らんや。何ぞ只今の一念において、直ちにする事の甚だ難き。

もろ矢

けたいの心

人の心すなほならねば

人の心すなほならねば、いつはりなきにしもあらず。されど、おのづから正直の人などかなからん。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りて愚かなる人は、偶、賢なる人を見てこれを憎む「大きなる利を得んが爲に少しきの利を受けず、いつはり飾りて名を立てんとす」とそしる。おのれが心に違へるによりて、この嘲をなすにて知りぬ。この人は下愚の性うつるべからず。いつはりて小利をも辭すべからず。假にも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば卽ち狂人なり。惡人のまねとて人を殺さば惡人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜(一)を學ぶは舜の徒なり。いつはりても賢を學ばんを賢と言ふべし。

——徒然草——

一七　作文趣味

高橋義雄(二)

文藝に關ずる趣味は極めて多端であるが中に、作文趣味程高雅

驥
(一)支那古代の聖天子。有虞氏。

(二)實業家、著述家。筹庵と號する。常陸の人。昭和十二年歿、年七十七。

韻文
(一)水戸藩主德川光圀の發意により、明暦三年(一六五七)に編纂に著手し、明治三年(一八七〇)に完成した國史。三百九十七卷、目錄五冊。

鴻儒
(二)第百十四代中御門天皇(一七一一—一七三五年)の御代。

(三)大日本史の編纂所。今、水戸市に彰考館文庫として殘つてゐる。

(四)伊藤仁齋の門人。

(五)安積澹泊。水戸藩の儒臣、彰考館の總裁。元文二年(一七三七年)歿、年七十二。

後へに瞠若たり

で且深妙なものはなからう。但し茲に作文といふのは、獨り文章のみに限らず、漢詩、國風その他各種の散文、韻文をも包含した稱呼である。

余は舊水戸藩士の家に生れたので、少年の頃から大日本史編纂(一)に從事した鴻儒碩學の苦心談を傳聞する機會が多かつた。これ等先進が記事または飜譯に沒頭して、一字一句にも心血を搾り、研鑽討覈の末、始めて會心の文字を得た時の得意は、果して如何であつたらう。

正德(二)の頃、彰考館(三)總裁であつた大井廣貞(四)が大日本史の序文を作る時、彼が平生武藝を好んで文筆に親しまなかつたので、館員一同窃かにこれを危んだが、序が成るに及んで、

「先人十八歲、伯夷傳を讀み、蹶然その高義を慕ふあり」(原漢文)

と起し得て凜然、氣風霜を挾み、老學安澹泊(五)と雖も猶後へに瞠若た

(一)支那唐の詩人。(西紀七八八年—八四三年)

(二)平安時代の詩人。儒者。清和、陽成の二天皇に仕へて詩文を善くし、文章博士兼越前權介となつた。元慶三年(一一五三年)歿、年四十六。

(三)朱雀大路の南端にあつた。

らざるを得なかつたので、皆その大手筆に駭服したさうだが、廣貞が「先人十八歳云々」の起語を思ひ得た時の心境は、蓋し手の舞ひ足の蹈む所を知らぬ程であつたらう。何事によらず、苦しんだ擧句に出來上つたものはその成績が面白く、またその快さは、他人の想像出來ないところである。古人が「愈〻窮して而して後に工なり」と言つたのも、またこの極致を道破したものであらう。

唐の賈(一)島が

鳥宿池中樹。僧敲月下門。

の二句を得た時、敲と推との取捨に思ひ迷うて慘憺たる苦心を重ねた挿話が、推敲といふ熟字の出典となつたのも、本朝の都良香(二)が月夜羅城門(三)を過ぎ、所作の一聯

氣霽風梳新柳髮。　氷消浪洗舊苔鬚。

と吟じた時、鬼神が樓上より歎賞の聲を發したといふ傳說がある

(一)平安時代の歌僧。俗名橘永愷。生歿年不詳。

(二)「都をば霞とともにたちしかど秋かぜぞふく白河の關」(後拾遺集卷九)

(三)「心なき身にもあはれはしられけり鳴立つ澤の秋の夕ぐれ」(新古今集卷四)

(四)敕撰和歌集。後白河法皇の宣によつて第十二代後鳥羽天皇の文治四年(一一八八年)藤原俊成が撰集した。全二十卷。

のも、また皆作文に對する熱狂的趣味を表現したものであらう。

總じて文學極盛の時には、文人韻士が相競つて名譽の佳作を得んと欲し、非常な眞劍味を以て嘔血苦心を費すその結果として、古今の秀句が出て來るので、平安時代などには、作者の意氣込も並々でなく、歌合に失敗して憂心忡々、疾をなす者もあれば、かの能因(一)法師のやうに「秋風ぞ吹く白河の關」の一首を有意義たらしめんとして、兒戲に類する旅行の狀を裝つたと傳へられる者もあり、妻子珍寶を敝履のやうに棄去つた西行法師ですら、「鳴立つ澤」(三)の一首が千載集(四)に載せられたか否かを氣遣つて、關東か

鳴立つ澤(橋本雅邦筆)

(一)鎌倉時代初期の歌人。元久元年(一八六四年)歿、年九十一。

(二)藤原定家。鎌倉時代の歌人。新古今、撰、續後撰、新撰、新勅撰、撰和歌集などの撰者。仁治二年(一二九一年)歿、年八〇十一。

錦心繡腸

らわざ〳〵上洛する途中、その選に洩れたと聞いて、すご〳〵引返したといふ逸話もあつて、當時文藝家の間に作文趣味がいかに濃厚であつたかを窺ふに足りる。この外、(一)藤原俊成が平居和歌を作るのに、古淨衣を著、桐火桶を抱き、凝然靜坐して、嘗て惰容を示さなかつたので、その歌もまた雅淡深邃の態があつたと言傳へられ、その子の定(二)家は室の南面を洞開して、襟を整へて端坐し、平常至尊の前にあるが如くしたので、その歌もまた氣格が高妙であつたといふ事など、當時の作家が何れも文字を以て生命とし、平常これに對する用意の極めて深切であつた態度を觀るべきであらう。

遙かに降つて江戸時代、文運勃興の際に於ても、各方面の文人韻士がその錦心繡腸を搾り盡して、前人未發の名句を得んと苦心した事は、平安時代に劣らぬが、かの十七字の俳句が平民文學として天下に横流してから、その字數の少いだけ、それだけ却つて多大の

(一)向井去來。俳人。芭蕉の門弟。寶永元年(一三六四年)歿、年五十四。

(二)芭蕉の門人。

(三)京都市右京區、大堰川の支流。

(四)芭蕉の門人。斯波一有の妻。享保十一年(一三八六年)歿、年六十三。

(五)「古池や蛙とびこむ水の音」

(六)「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」

(七)「夏草や兵どもが夢の跡」

(八)「塚も動け我が泣く聲は秋の風」

(九)第百十三代東山天皇の御代。(一三四八年—一三六三年)

(一〇)淨瑠璃作者。本名杉森信盛。生地不詳。享保九年(一七二四年)歿、年七十二。

洗煉を要する譯で、俳人者流が一字一句にも死力を盡した苦心談は、枚擧に遑がない。芭蕉が臨終の六日前、枕頭に侍した去(一)來に向つて、「我が曩に野(二)明に示した『大堰川波に塵なし夏の月。』と、清(三)瀧で詠んだ『清瀧や波にちりこむ青松葉。』と、園(四)女に贈つた『白菊の目にたてゝ見る塵もなし。』との三句は、意匠の相類する嫌あれば、前二句を廢して『白菊』の一句のみを留むべきか、汝の意如何。」と問うたので、去來は師翁が名の爲、道の爲、死に至るまで一二句の取捨をも忽諸にしないその執心の深切なのを思うて、感涙袂を濕したといふ美談があるが、この一事によつて推想するに、芭蕉が「古(五)池や」「枯(六)枝に」「夏(七)草や」「塚(八)も動け」などの名句を得た時の興趣は果して如何。孤獨な彼の一生も、この趣味があつたればこそ、非常に幸福だつたらうと思はれる。

元(九)祿時代の文藝を回顧すれば、當然近(一〇)松巢林子を聯想せざるを得ない。彼は戲曲の奇想を天外より落し來つたのみならず、字句の

推敲も並々の苦心でなかつた。彼がその作中に於て「悲しい涙は目より出で、無念涙は耳からなりとも出るならば、言はずと心を見すべきに」と言つて居るが如き、彼が文才の一端を見るべきものである。その後彼に繼いで幾多の院本作者が輩出し、平民文學に萬丈の光彩を放つたのも、畢竟彼の首唱によるもので、彼が天性作文趣味に富み、一生これに浸つた幸福は、蓋し芭蕉と伯仲の間にあつたらうと思ふ。

明治時代に於て最も作文趣味に富んだ一人は、我が師小出粲翁である。翁は、和歌は難題程詠みよいものだと常に言つて居られた。或時、人の爲に螢を詠じた自作の詩を揮毫して、誤つて「光」の一字を脱するや、翁は一考した後、傍に

なほざりに書きけちたりと思ひしは
光かくして飛ぶほたるなり

(一)天の網島中卷にある句。

平民文學

伯仲の間

(二)歌人。石見國の人。明治四十一年(一二五六八年)歿、年七十八。

と一首の和歌を書添へられたので、却つて面白い一幅となつた事があつた。

この時代の小説家では、尾崎紅葉(一)は最も作文趣味に富んで居た一人である。明治二十九年頃であつたか、余は三越呉服店(二)から發行する「花衣」といふ雜誌の編輯を紅葉に頼みに行つた事がある。その頃紅葉は、かの金色夜叉(三)の執筆中であつたらしく、「自分は晝間は家庭の紛雜を厭ひ、午前二時頃から起出て執筆するのを常とするが、この非衛生的習慣が遂に不治の胃病を醸し、御覽の通り血色が甚だ勝れません」と言ふ。その面貌を熟視すれば、瞼下に青黑い斑點を現じて、病魔の深く膏肓に入つて居る有樣、誠に氣の毒に堪へなかつた。けれども彼が深更幽窓の下に坐して、今尚人口に膾炙する程の

尾崎紅葉

(一)小説家、俳人。東京の人。明治三十六年(一五六三年)歿、年三十七。

(二)東京市日本橋區にある株式會社三越の前身。

(三)小説。明治三十一年讀賣新聞に連載。紅葉晩年の精力を注いだもの、非常な好評を博したが、未完の紅葉は病歿した。

名文句を綴り上げた時の愉快さを想像すれば、彼の短生涯に於て滿喫した作文趣味の分量は、蓋し何人よりも豐饒であつたらうと思はれる。

—趣味ぶくろ—

一八　歌物語

上手の心

藤原信實[一]

近頃和歌の道殊にもてなされしかば、內裏、仙洞、攝家孰れもとりどりに底を究めさせ給へり。臣下許多聞えし中に、民部卿定家、宮內卿家隆とて家の風絕ゆる事なく、その道に名を得たりし人々なりしかば、この二人には孰れも及ばざりけるに、或時攝政殿[二]、宮內卿を召して、「當時正しき歌人多く聞ゆる中に、孰れか勝れ侍る。心に思ふやう、ありのまゝに」と御尋ありければ、「孰れともわき難く候」とばかり申して、思ふやうありげなるを、いかに〳〵とあながちに問はせ

(一)鎌倉時代の歌人、畫家。文永二年(一九二五年)、年八十九。歿。

(二)藤原良經。

給ひければ、懷より疊紙を落して、やがて出でにけり。御覽ぜられければ、

(一)あけばまた秋の半ばも過ぎぬべし
かたむく月のをしきのみかは

と書きたり。この歌は民部卿の歌なり。かゝる御尋あるべしとはいかでか知るべき。唯もとより面白く覺えて書きつけて持たれけるなめり。その後また民部卿を召して、さきのやうに尋ねらるゝに、これも申しやる方なくて、

(二)かさゝぎの渡すやいづこ夕霜の
くもゐに白き峯のかけ橋

藤原定家

疊紙

(一)新勅撰集卷五秋の部下に見える。

(二)新勅撰集卷六冬の部に見える。

(一)日野資成の子。姓は藤原。名は金葉集及び大日本史にはある。範國とある。

(二)愛媛縣越智郡大三島宮浦村(瀬戸内海の大三島)なる大山祇神社。國幣大社。

(三)金葉集卷十雜部下に見える。

(四)唐の太宗皇帝。いなごを呑んだ事は貞觀政要に出てゐる。

と高やかに詠めて出でぬ。これは宮内卿の歌なりけり。忠實の上手の心は、されば一つなりけるにや。

——今物語——

關の秋風

能因入道、(一)伊豫守實綱に伴なひて、かの國へ下りたりけるに、夏の初め日久しく照りて、民の歎淺からざるに、神は和歌にめでさせ給ふものなり、試に詠みて(二)三島に奉るべき由を、國司頻りに勸めければ、

(三)あまの川苗代水にせきくだせ
あまくだります神ならば神

と詠めるを、みてぐらに書きて、神司して申し上げたりければ、炎旱の天俄に曇りわたりて、大きなる雨ふりて、枯れたる稻葉おしなべて綠にかへりけり。忽ちに天災を和ぐる事、唐の(四)貞觀の帝の、いなむしを呑めりける故事にも劣らざりけり。

(一)後拾遺集卷九羈旅の部に見える。

念なし

(二)源有仁。第七十二代白河天皇の御孫。詩歌管絃を善くした。(一一八〇年四十七歳)

この入道は至れるすきものにてありければ、

(一)都をば霞とともにたちしかど
秋かぜぞふく白河の關

と詠めるを、都にありながらこの歌を出さん事念なしと思ひて、人にも知られず久しく籠りゐて、色を黑く日にあたりなして後、陸奥國の方へ修行のついでに詠みたりとぞ披露し侍りける。

——古今著聞集——

秋の青柳

(一)花園左大臣家にはじめて參りたるける侍の、名簿のはしがきに、「能は歌よみ」と書きたりけり。おとゞ秋のはじめ南殿に出でゝ、はたおりの鳴くを愛しておはしましけるに、暮れければ、「下格子に人參れ」と仰せられけるに、「藏人五位たがひて、人も候はず」と申して、この侍參りたるに、「たゞさらば汝おろせ」と仰せられければ、參りたるに、

「汝は歌よみな」とありければ、畏まりて、御格子おろしさして候に、「このはたおりをば聞くや。一首つかうまつれ」と仰せられければ、「青柳の」と、はじめの句を申し出したるを、さぶらひける女房たち、をりに合はずと思ひたりげにて、笑ひ出したりければ、「ものを聞きはてずして笑ふやうやある」と仰せられて、「とくつかうまつれ」とありければ、

青柳のみどりの絲をくりおきて
なつへて秋ははたおりぞ鳴く

と詠みたりければ、おとゞ感じ給ひて、萩おりたる御直垂おし出して、賜はせけり。(一)寛平の歌合に、初雁を友則、

はる霞かすみていにしかりがねは
今ぞなくなる秋霧のうへに

と詠める、左方にてありけるに、五文字を詠じたりける時、右方の人

(一)第五十九代宇多天皇の御時。(一一五〇年)
(二)平安時代の歌人。姓は紀。貫之の甥。古今集撰者の一人。殘年不詳。
(三)古今集卷四秋の部に見える。

こゑ〳〵に笑ひけり。さて次の句に、「かすみていにし」と言ひけるにこそ、音もせずなりにけれ。同じ事にや。

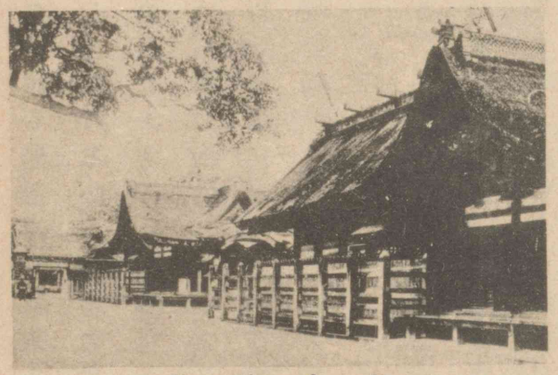
—古今著聞集—

松ものいはゞ

(一)嘉應二年十月九日、(二)道因法師人々に勸めて、(三)住吉の社にて歌合しけるに、後德大寺、左大臣、前、大納言にておはしけるが、この歌を詠み給ふとて、「社頭、月」といふ事を、

(四)ふりにける松もの
いはゞ問ひてまし
むかしもかくや
すみのえの月

かくなん詠み給ひけるを、判者俊成卿殊に感じけり。世の人々もほ



住吉神社

(一)第八十代高倉天皇の御代。(一八三〇年)
(二)歌僧。俗名藤原敦頼。第七十五代崇德天皇の朝に馬寮使として仕へた。殘年不詳。
(三)大阪市住吉區住吉町。官幣大社。
(四)千載集卷二十神祇の部に見える。

めのゝしりける程に、その頃、かの家の領筑紫瀨[1]高の莊の年貢積みたりける船、攝津國に入らんとしける時、惡風に逢ひて、既に入海せんとしけるに、いづくよりか來りけん、翁一人出で來りて、漕直して別事なかりけり。船人怪しみ思ふ程に、翁の言ひけるは「松ものいはばの御句、面白う候ひて、この邊に住み侍る翁の參りつると申せ」と言ひて失せにけり。住吉大明神のかの歌を感ぜさせ給ひて、御體を現し給ひけるにや。

（「古今著聞集」に據る）

一九　建武の中興

北畠親房[1]

東にも上野國に源義貞といふ者あり、高氏が一族なり。世の亂に思を起し、幾何ならぬ勢にて鎌倉へうちのぞみけるに、高時等運命きはまりければ、國々の兵つき從ふ事、風の草を靡かすが如くして、五月二十二日にや、高時をはじめとして、多くの一族皆自滅してけ

（一）今の福岡縣（筑後國）山門郡瀨高町地方。

（二）吉野朝の忠臣。正平九年（一三五四年）歿、年六十三。

（三）元弘三年。（一九九三年）

符契を合す

れば、鎌倉また平ぎぬ。符契を合する事もなかりしに、筑紫の國々、陸奥、出羽の奥までも、同じ月にぞ鎭まりにける。六七千里の間一時に起りあひにしに、時の至り運の極りぬるはかゝる事にこそと、不思議にも侍りしものかな。

君はかくとも知らせ給はず、攝津國西の宮といふ所にてぞ聞かせましましける。六月四日東寺に入らせ給ふ。都にある人々も參り集りしかば、威儀をとゝのへ、本の宮に還幸し給ふ。いつしか賞罰の定めあり。年號ももとの如く元弘と號せらる。平治より後、平氏世を亂りて二十六年、文治のはじめ頼朝權を專らにせしより、

義貞鎌倉に攻入る（小山榮達筆）

宗廟

藩屏

父子相繼ぎて三十七年、承久に義時世を執りおこなひしより百十三年、すべて百七十餘年の間、おほやけの世を一つに知らせ給ふことと絶えにしに、この天皇の御代に、掌をかへすよりも易く一統し給ひぬること、宗廟の御はからひも時節ありけりと、天下擧りてぞ仰ぎ奉りける。

同じき年の冬十月に、先づ東の奥を鎭めらるべしとて、參議右近中將源顯家卿を陸奥守になして遣されぬ。代々和漢の稽古をわざとして朝家に仕へ、政務に交る道をのみこそ學びつれ、吏途の方にも習はず、武勇の藝にもたづさはらぬ事なれば、たび〳〵いなみ申しゝかど、「公家既に一統しぬ。文武の道二つなるべからず。昔は皇子、皇孫、若しは執政の大臣の子孫のみこそ、多くは軍の大將にもさゝれしか、今より武を兼ねて藩屏たるべし」と仰せ給ひて、御躬ら旗の銘を書かしめ給ひ、さま〴〵の兵器をさへ下し賜ひぬ。任國へ赴く

抽賞

(一)第九十七代後村上天皇。

事も絶えて久しくなりにしかば、古き例をたづねて罷申(まかりまをし)の儀あり、御前に召し敕語ありて、御衣、御馬などを賜はりき。なほ奥の固めにもと申し受けて、御子を一所伴なひ奉りぬ。かけまくも畏き今上皇帝の御事なれば、こまかには記さず。かの國に著きにければ、誠に奥の方ざま、陸奥、出羽の兩國をかけて、皆靡き從ひにけり。同十二月左馬頭源直義の朝臣、相模守を兼ねて下向せり。これも四品上野太守成良親王を伴なひ奉りぬ。この親王後に暫く征夷大將軍を兼ねさせ給ひき。直義は高氏が弟なり。

抑、かの高氏、御方に參れりしその功は誠に然るべし。ずゞろに寵幸ありて抽賞せられしかば、偏に賴朝卿天下を鎭めしまゝの志にのみなりにけるにや、いつしか越階して四位に敍し、左兵衛督に任ぜられぬ。拜賀の先にやがて從三位に敍し、程なく參議從二位までに陞せられ、武藏、常陸、下總三箇國の吏務、守護及び數多の郡莊を賜

理運

はりぬ。弟直義左馬頭に任じ、後に四位に敍せられぬ。昔賴朝ためしなき勳功ありしかど、高位高官に昇る事は亂政なれば、果してその子孫早く絶えぬとぞ申し傳へたる。かの高氏等の先人は、賴朝、實朝の時に親族なりしかども、優遇せられし事もなく、唯家人の列なりき。實朝の八幡宮に拜賀せし日も、地下前驅二十人の中に加へられけり。たとひ賴朝の後胤なりとも、今更登用すべしとも覺えず。況や久しき家人なれば、さしたる大功もなくてかくやは抽賞せらるべきと、怪しみ申す輩もありけりとぞ。關東の高時天命既に窮りて、君の御運を開き給ひし事は、更に人力と言難し。武士たる輩、言はゞ數代の朝敵なり。御方に參りてその家を失はぬこそ餘りある皇恩なれば、更に忠を致し勞を積みてぞ、理運の望をも企て侍るべき。然るを天の功を盜みて己が功と思へり。なげかはしき事にこそ。かくて高氏が一族ならぬ輩も數多昇進し、昇殿を許されしもありき。されば、ある人の申されしは、「公家の御世に復りぬるかと思ひしに、なかなかなほ武士の世になりぬ」とぞありし。

——神皇正統記——

前者の轍を見る

北畠親房

二〇　人臣の道

北畠親房

凡そ王土に生れて忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。されども後の人を勵まし、その跡を憐びて賞せらるゝは、君の御政なり。下として競ひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望を致す事、自ら危うする端なれど、前車の轍を見る事は、誠に有難き習なりけんかし。中古

までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し、家を失ふためしあれば、戒めらるゝもことわりなり。

鳥羽院の御代にや、「諸國の武士の源平の家に屬する事を停むべし」といふ制符たび〳〵ありき。源平久しく武を執りて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを徵し具しけるに、近代となりてやがて語らはるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されにき。果して今までの亂世の基なれば、言ひがひなき事になりにけり。

この頃の諺には、一たび軍に駈合ひ、或は家子、郎從節に死ぬるたぐひもあれば、「我が功におきては日本國を賜へ」、若しは「半國を賜はりても足るべからず」などぞ申すめる。誠にさまで思ふ事にはあらじなれど、やがてこれより亂るゝ端ともなり、また朝威の輕々しさ

(一)第七十五代崇徳天皇の御代。鳥羽法皇院政を攝せられた頃。

制符

語らはる

言語は君子の樞機

堅き氷は霜を履むより至る

亂臣賊子

も推量らるゝものなり。「言語は君子の樞機なり」と言へり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕る事はあるべからぬ事にこそ。「堅き氷は霜を履むより至る」習なれば、亂臣賊子といふ者は、その初め言葉を愼まざるより出で來るなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらず、人の心の惡しくなり行くを末世とは言へるにや。昔許由(一)といふ人は、帝堯(二)の國を傳へんとありしを聞きて、潁川(三)に耳を洗ひき。巢父(四)はこれを聞きて、この水をだにきたながりて、渡らざりき。その人の五臟六腑の變るにはあらじ。よく思ひならはせる故にこそあらめ。

なほ行末の人の心想ひやるこそあさましけれ。大方おのれ一身は恩に誇るとも、萬人の怨を殘すべき事をばなどか顧ざらん。君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて、限りなき人に頒たせ給はん事は、推しても量り奉るべし。若し一國づゝを望まば、六十

(一)堯の時の隱士。
(二)支那太古の帝王。陶唐氏。姓は伊耆、名は放勛。帝嚳の子。
(三)支那河南省開封府。
(四)堯の時の隱士。

五臟六腑

萬姓の主

六人にて皆ふさがりなん。一郡づゝといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悅ぶとも、千萬人の人は悅ばじ。況や日本の半ばを心ざし、みながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して言葉にも出で、面にも恥づる色のなきを、謀叛の初と言ふべきなり。昔の將門[一]の比叡山に登りて大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひにやありけん。昔は人の心正しくして、おのづから將門に見も懲り聞きも懲り侍りけんを、今は人々の心かくのみなりにたれば、この世は愈〻衰へたるにや。

漢の高祖[二]の天下を取りしは、蕭何[三]、張良[四]、韓信[五]が力なり。こを三傑と言ふ。萬人に勝れたるを傑と言ふとぞ。中にも張良は高祖の師として、「籌を帷幄の中にめぐらして、勝つ事を千里の外に決するはこの人なり」と宣ひしかど、張良は驕る事なくして、留と言ひて少しきなる所を望みて、封ぜられにけり。あらゆる功臣多く亡びしかど、張良

(一)平將の第三子。下總國猿島に假宮を建てゝ朝儀に擬へたゝ爲に天慶三年(一六〇年)遂に誅せられた。

(二)漢の第一代の皇帝。姓は劉、名は邦。

(三)漢の高祖の宰相。

(四)漢の武將。字は子房。

(五)漢の名將。籌を帷幄の中にめぐらす

は身を全くしたりき。近き世の事ぞかし、賴朝の時までも、文治[一]の頃にや、奥の泰衡[二]を追討ちしに、自ら向ふ事ありしに、平重忠[三]が先陣にてその功勝れたりければ、五十四郡[四]のうちいづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、極めたる少き所を望みて、賜はりけりとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめん爲にや、賢かりけるをのこにこそ。

——神皇正統記——

二一　世界の最舊帝國

源親房卿が神皇正統記に、「たゞ我が國のみあめつち開けしはじめより今の世の今日に至るまで、日嗣をうけ給ふ事よこしまならず。一種姓の中におきても、おのづから傍より傳へ給ひしすら、なほ正に歸る道ありてぞ、たもちましける。これ、しかしながら神明の御誓あらたにして、餘國に異なるべきいはれなり」と書かれたの

(一)後鳥羽天皇の文治五年。(一八四九年)

(二)藤原泰衡。

(三)畠山重忠。

(四)昔奥州は五十四郡あつた。

跳梁する式微

(一)江戸時代末期薩摩の歌人。藩士。明治五年(二五三二)歌道御用掛となつた。明治六年歿、年七十五。

は、今より凡そ五百八十年以前で、親房卿は東洋の國々の歴史をこそ知つてをられたが、世界各國の樣子は全く知られなかつたのである。今日世界交通の世の中となつて、諸外國の歴史の知得られるやうになつても、この言は依然動かぬのである。萬世一系の天皇上にいまして、千古不易の臣民下に仕へ奉る事は、世界各國に全く類例のない事である。國史の上に多少の波瀾はあり、武家の跳梁した時代には、皇室の式微と申すべき時代もあつたが、(一)八田知紀大人が歌つたやうに、

いくそたびかきにごしてもすみ返る
水やみ國のすがたなるらん

で、波瀾が一たび靜まれば、また元のやうな清澄濁りのない大御代となるのである。

凡そ世界の國々を見渡しても、我が國程の舊國はない。支那の國

(一)西紀一九一二年(我が明治四年)十五年清朝は滅び支那は共和國となつた。
(二)滿洲族。
(三)蒙古族。
(四)滿洲族。
(五)西紀一一六〇年。一一六四年。
(六)西紀一一七五年。一一七九年。
(七)西紀一一六六年。一一七二年。
(八)西紀一一七六年。一一八三年。

は(一)二十年前までは、世界の最舊帝國と稱せられた。成程、舊國には相違ない。しかし、唯舊いと言ふばかりで、二十何回も帝室が更代した。支那人種ではない他の民族が、(二)金とか、(三)元とか、(四)清とかいふ朝廷を立てた。幾たびか他人種に征服された。帝國は幾たびか斷絶し、復興したのである。殊に近年の革命では、君主國から民主國に代つてしまつた。支那は全く革命を繰返した國である。

まして歐洲各國の歴史は、王室と人民との爭の繰返された記錄で、中にも英王の(五)チャールス一世、佛王の(六)ルイ十六世など斷頭臺の露と消えた悲慘な歴史は、日本人の夢にも考へ及ばぬ所である。それ故、今の王室は皆新しい。現在の英國皇室はハノーバー家と言つて、一七一四年に卽位した(七)ジョージ一世から始つてゐる。墺國皇帝は一八〇六年に(八)フランシス一世が始めて帝と稱したもので、ドイツ帝國の建設は一八七一年卽ち明治四年の事であつたが、何れも亡び

(一)西紀一七〇一年。
(二)西紀一八二〇年。—一八七八年。
(三)西紀一五九七年。—一六四五年。
(四)西紀一六七二年。—一七二五年。
(五)西紀一八六八年。—一九一八年。
(六)西紀一九一七年。

た。プロシャ王は二百餘年前、赤穂義士夜討の前年始めて王位に卽いたのであつた。イタリー王國も一八六一年ビクトル・エマヌエル二世が始めて統一の事業を遂げて、イタリー王となつたのである。ロシヤ前帝の家はロマノフ家と言つて、一六一三年ミハイル・フェオドロウィッチが始めて帝位に卽いたので、ピーター大帝などといふ英主もあつたが、全露の前皇帝ニコラス二世も、あはれ先年の革命で難に遭はれたのである。かういふ諸國の歷史を見渡すと、親房卿の言はれたやうに、我が帝國はどうしても餘國と異なつたいはれがあるやうに思はれる。とにかく世界中の最も舊い國である事は疑がない。親房卿が正統記を書かれた時分には、イタリー王室も、さきのプロシャ王室も、乃至はオーストリヤ王室も、皆普通の人民の列に居つたのである。

我が國が諸外國に異なるいはれは何か。それは我が建國の由來が

(一)雄略天皇の下し給うた詔敕に「義乃君臣、情兼父子。」とある。
(二)齊、楚、燕、韓、魏、趙。

おのづから別であるのに起因し、皇室と國民とが、「義ハ君臣ニシテ情ハ父子」であるといふ親密な關係によつて結び附けられてゐるからである。我等は萬世一系の事實を誇るに先だつて、その事實の成立ち得た原因を知らなければならぬ。天照大神が「これ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫ゆきて知らせ。さきくませ。寶祚の隆えまさんこと、天壤と共に窮りなかるべし」と仰せられた神敕のつゆたがはず、眞に他の諸國には比類のない國史を成し得た理由を知らなければならぬ。

昔支那の秦の始皇は六國を平げて皇帝となり、自ら始皇と稱して萬世に至らせようと宣言した。しかし、それは全くの空想に終り、僅かに二世で漢に亡されたのであつた。彼と此と比較にならない原因を知らなければならぬ。

溫柔　おとなしいこと。溫厚なこと。
天の長田狹田　高天原の大小の田といふ意。
耕穡　たがやすこととりいれること。
齋機殿　神に奉る御衣を織るけがれのないはたどの。
新嘗　その年に出來た穀物を諸神に奉り、御自身も召上ること。
寛恕　おほ目に見てゆるすこと。

自修文

建國の昔と神祇の尊崇

古典によつて皇祖天照大神の御事蹟を察するに、賢明透徹で、極めて御德が高かつたのであるさうして極めて溫柔で、玉のやうな性質でいらせられたのである。躬ら天の長田狹田を作らせ給ふとあるから、人民と同じく耕穡の業にさへお盡しになつたのである。齋機殿に入つて機を織らせられた事も見えるから、機業をさへおいそしみになつたのである。尊貴の御身を以て、かく下民と同じく農工業をも親らせられたのである。またかの新嘗をお營みになつたのを見ても、いかに下民の勞苦に御同情あそばされ、且下民の幸福に懸念せさせられたかゞ窺はれる。御弟の素戔嗚尊が亂暴を飽くまでも御忍耐あそばされ、御寛恕あそばされたのを見ても、その美しい御性質は拜察せられる。しかし、素戔嗚尊が天上にのぼり來ますと聞かせられて、男裝して弓矢を

黑き心　惡い心。邪心。
毅然　强くしつかりしてゐるさま。
三代の間　瓊瓊杵尊、彦火火出見尊、鸕鷀草葺不合尊。
昔の人　「ひさかたの」の歌の作者は大伴家持、「あきつしま」の歌は作者不詳。
ひさかたの　天の枕詞。
すべらぎ　天下をすべ治め給ふ御方。

手挾み「國を奪ふ黑き心あらばゆるさじ」と御決心あそばされた御氣勢に、十分な御勇氣も見えるのである。これ等を總合して考へれば、大神は實に我が日本國民の理想とも見るべき御方であらせられたのである。溫和で、勤勉で、一大事變に際しては毅然たる勇武、一歩も退かない御氣象があらせられたのである。

皇孫瓊瓊杵尊は天照大神の嚴かな御言葉を畏んで、我が國に降臨せられた。それから三代の間は共に筑紫に都せられて、國土の御經營にいそしまれた。瓊瓊杵尊から第四代目の神日本磐余彦尊即ち神武天皇に至つて、始めて大和國に都せられて、皇威が廣く四方に及んだので、この天皇から人皇の世と稱し、この天皇の御即位の式を擧げさせ給うた年を我が紀元第一年と數へるのである。昔の人の歌に瓊瓊杵尊をば、

ひさかたの、天の戸開き高千穗の、峯に天降りし
すべらぎ。

秋津洲　我が國の美稱。
畝火　高市郡畝傍町。
宮柱太知り立てゝ　宮柱を立派に立てゝ、宮殿を營んでの意。

古典　古い書籍。

不逞　おごりほしいまゝのこと。
まつろはぬ者　服從しない者。

歸順する　朝廷の命にしたがふ。

といひ、神武天皇をば、

秋津洲、大和の國の橿原の、畝火の宮に宮柱、太知り立てゝ天の下、知らしめしけるすべらぎ。

と稱へてゐる。かく、すべらぎの御名の起りも古く、日本帝國の創業もまた遠い昔の事である事を知らなければならぬ。

建國の創業に與らせられた瓊瓊杵尊にしても、神武天皇にしても、常に天照大神の御教を守つて、その聖德を以て人民を感化せられた事は、古典に考へて知られる事である。外國の歷史に見えるやうに、單に武力一遍で暴壓的に服從させたのではなかつたのである。不逞の徒で、皇師に逆らふ者はあつた。それを古典には、まつろはぬ者と言つてゐる。そのまつろはぬ者を平定せられる事をやはすと言つてゐる。やはすは和かにする事で、これまで頑强に我意を張つて敕命を奉じなかつた者の心を和げて、心底から歸順させるのである。また、ことむくといふ語もある。ことむ

德治　德でをさめること。

專制　思のまゝにとりさばくこと。

歷然　あきらか。はつきり。

くとは言を以て諭して、從來他の方面に向つてゐた者を、こちらへ向かせる事である。これ等の語を考へて見ても、我が創業の君が、いかに慈を以て、德治を以て不逞の徒をも心服せしめられ、慰撫せられたかゞ察せられるので、決して無理に力ばかりでおさへられたのではない。これが卽ち大神の大御心で、列聖は常にこの大御心を御繼承あそばされたのである。

支那には御民といふ語もあり、牧民といふ語もある。人民を馬や牛に譬へたのである。君主專制の意味が、この語の上にも歷然としてゐる。我が國には決してかういふ語はない。すべらぎはすべてを統べる義で、すべらぎ卽ち天皇が國を治め給ふ事を「御代知ろしめす」といふ。知ろしめすは「お知りなさる」といふ意味である。よく下民の事情を知るといふ事である。よく下情に通じて、始めて仁慈の政が行はれるのである。まつろはぬ者に對してはこれをやはし、これをことむけ、さて人民をばおしなべて知ろしめ

宮造する　宮殿を造營する。
(一)奈良縣磯城郡。櫻井町の東南。海拔二四四メートル。
(二)第十代。

したのである。

神武天皇は大和國橿原に宮造して御即位あらせられた年、天神地祇を鳥見山(一)に祭つて、祖先尊崇の大義を明らかにせられた。歷代の天皇も常にこの事に御心を注がせられて、今の世に至るまで變りはない。天照大神が皇孫にお授けになつた神鏡は、初は宮中に床を同じうして安置せられたが、それは神威をけがす虞があるといふので、崇神天皇の御代に(二)は、始めてこれを大和國笠縫邑に祭らせられ、次の御代垂仁天皇の御時に、今の伊勢の五十鈴川の上にお祭りになつたのである。聖德太子は外國文明を我が國へ輸入して、我が國の進歩をお圖

鳥見山（伊藤龍涯筆）

扞格する　さはりさからふ。
神道　我が國固有の教道。神祇を敬ひ、祭祀をつゝしむ道。
神佛混淆　神と佛とを混淆して祀ること。
流布する　あまねくひろめる。
產土神　人の生れた土地を守護する神。氏神。
傳播　つたはりひろまること。

りになり、大いに佛教の興隆に力を盡されたが、推古天皇の十五年には、文武百官と共に神祇を拜して、神祇崇敬の道を明らかにせられた。即ち神祇を祭るのは、信仰と何等矛盾扞格するのでない事を示されたのである。爾來佛教の方ではだん〳〵神道に近づいて來て、神佛混淆といふ姿になつたが、これは一面に於て、神祇尊崇の國民の信念が、いかに牢いものであるかを證明するのである。いかに偉大な宗教の力を以てしても、國民の神祇尊敬の念を、根本から拔取つてしまふ事は出來なかつたのである。佛教を流布するに力めた高僧たちにしても、やはり日本國民であるから、國民の信念を離れる事は出來なかつたのであらう。それ故、佛教が大いに興隆して、堂塔伽藍が到る所に聳えるやうになつても、神社は神社で、昔のまゝの崇敬を受けたのである。

產土神の鄕社村社が丘陵森林の間に隱見して、日本國體の特色を語つてゐるのもこれが爲で、西洋などでは、耶蘇教の傳播と

共に、かういふ古來の歷史的記念物は全く一掃されたのである。

(一)光仁天皇の寶龜(二)三年の記事に、大和國西大寺(三)の西の塔に雷が落ちた。これを卜つてみると、近江國滋賀郡(四)小野神社の境內の木を伐つてこの塔を構へたので、その神のたゝりであるとわかつたと書いてある。かういふ話は、佛教興隆の時代に於ても、國民の敬神思想がいかに熾盛であつたかを證明するものである。

國家の大事ある毎に、神にも佛にも祈請せられるのが常であつたが、かの蒙古來寇の場合には、天皇は御身を以て國難に代らうと、皇大神宮にお祈りになつた。これまでの歷史には龜山上皇とあつたが、新しい史料の發見で、上皇も天皇もお祈りになつた事がわかつた。さうして大風が吹起つて、蒙古の船がさん〳〵にうち破られた時、國民はこれを神風と唱へた。神國を外難から救つた風で、祖宗の神靈の吹起された風と信じたのである。

熱田神宮の靈劍を僧某が盜み出して、朝鮮へ渡らうとしたが、

一掃　一度にのこらずはらひ去ること。
(一)第四十九代。
(二)一四三二年。
(三)生駒郡伏見村。眞言律宗の巨刹。
(四)滋賀縣滋賀郡和邇村。小野臣の氏神。この事は續日本紀といふ書に見えて居る。
熾盛　はげしくさかんなこと。

途中大暴風で引返して、遂にその意を果さなかつたといふ傳說があるもとよりこれは歷史上の事實ではあるまいが、かういふ傳說の生ずるのを見ても、神の威靈を尊んだ國民思想の一端が窺はれる。

二二　聖土

西條八十(一)

アジヤ(二)の東聖土あり、
天地の正氣あつまりて、
積むや芙蓉の峯の雪、
咲くや萬朶のさくら花。

萬古にわたる皇統は、
空に燦たる天の河、

萬朶の花

(一)詩人。早稻田大學教授。明治二十五年(一八九二年)東京市に生れた。

仰げばたかき洪恩に、
一億の民たゞ涙。

あゝこの國の水清く、
曾て異邦に汚されず。
あゝこの國の山青く、
生々日々に新たなり。

君臣の義と父子の愛、
花づなのことまじはりて、
仁慈と忠と孝悌と、
琴の音のごと調べあり。

孝悌

今西歐に日は暮れて、
光を呼ばふ聲すなり。
世界は明けんほのぐ〳〵と、
神の國なる東より。

二三　意義ある生活

——日本精神——

永田秀次郎(一)

諺に「隣の雜炊はよい匂がする」といふ事がある。西洋でも「隣の畠の林檎は赤い」と言つて居る。世の中は「夜目遠目傘の内」で、少し隔ると善く見えるが、手に取つて見ればさ程でもないといふのが通り相場である。唐の太宗(二)が嘗て侍臣を集めて、「創業と守成と孰れか難き」と問うた。房玄齡(三)はこれに答へて、「草昧の始め群雄並び起り、力を角して後これを臣とす。創業難し」と言つた。然るに魏徵(四)はこれに反對して、「古へより帝王はこれを艱難に得て、これを安逸に失はざる

(一)政治家、貴族院議員、拓殖大學學長。俳人で青嵐と號する。明治九年(二五三六年)兵庫縣に生れた。

(二)唐第二代の天子。姓は李、名は世民。(西紀五九七年—六四九年)

(三)唐の宰相。字は喬。

(四)唐の名臣。字は玄成。

通り相場
創業と守成

局外者
局に當る

なし。守成難し」と答へた。太宗はこれを聽いて、「玄齡は朕と共に天下を取り、百死を免れて一生を得たり。故に創業の難きを知る。魏徵は朕と共に天下を安んじ、常に安逸の間に禍亂の生ずる事を恐る。故に守成の難きを知るのみ」と言つた。この話は、單に政治上の事ばかりでなく、社會上のあらゆる現象にも通用する興味ある事である。

凡そ局外者は、何事も事物の表面のみを見て裏面を知らないから、只何となく羨ましく思ひ易い。然るに一旦その局に當つてみると、なか〳〵そんなものではなくて、他所から見るやうに善いものではない。いや、その暗黑方面の醜陋なるに懲り〳〵してしまふのである。(一)スマイルズの書いた本の中に面白い話がある。曾て名醫アバーネシーに診察を請うた一人の胃病患者があつた。アバーネシーは診察した結果、その患者に告げて、「貴下の病氣には藥の必要がない。なるべく氣分を快活に持てば宜しい。グリマルヂー(曾我廼家

(一)イギリスの著述家。(西紀一八一二年―一九〇四年)

共に談ずるに足らぬ

(一)フランスの喜劇作家、俳優。(西紀一六二二年―一六七三年)

五郎の如き喜劇家)の喜劇でも見て大いに笑つて居るのが、藥よりは效能がある」と言つた。ところがその患者が愕然として、「いや、私がそのグリマルヂーであります」と答へたので、流石の名醫もこれには開いた口が塞がらなかつたといふ事である。私は曾我廼家が憂鬱性であるかないかは知らないが、喜劇家がすべて樂天家であると思ふのは大間違である。有名な喜劇作者モリエール(一)は確かに憂鬱性であつた。落語家なども自分の家庭では、なか〳〵嚴格な顏をして居るといふ事である。聞くと見るとは大違で、何の職業にでも、それ相當の苦勞苦痛のある事は免れないのである。

たゞ見れば何の苦もなき水鳥の
脚にひまなきわがおもひかな

水面のみを見て水中の努力を知らぬ者は、到底共に談ずるに足らぬ。いかなる職業にもそれ相當に苦勞があつて、決して外觀のやう

な氣樂なものではなく、また其所に面白味があるのであるから、各人は各その職業を樂しむ心掛がなくてはならぬ。

(一)ソクラテスは「人各その志すところに隨ひ、完全の域に到らん事を努むべし。大工は一流の大工となり、政治家は一流の政治家とならん事を志すべし。かくの如くにして眞の成功を得べきなり。優秀なる大工は、木を削るのみにて優に月桂冠を受くる價値あり」と言つて居るが、この言の如くに、優秀な大工は木を削る事だけで優に月桂冠を受ける資格があるといふ所に、人生の價値があるのであつて、茲に職業の神聖といふ事が生れて來るのである。「己の職を樂しみ、己の職に努めて、その志すところに隨つて完全の域に達する事を努めるのが、人生の意義ある生活であると思ふ。—梅白し—

(一)ギリシヤの哲學者。世界の四聖の一人。(西紀前四七〇年—三九九年)

月桂冠

職業の神聖

帝國實業讀本　改制新版　卷五　終

附錄

一　敬讓語（口語）

一　敬讓の意を含む文語動詞

一　國語假名遣一覽

敬讓語（口語）

一　名詞

（甲）お年　お顏　お宅　お歸り　お休み　おいくつ
おいくたり　お一つ　お十一　御返事　御挨拶
御機嫌　御本

（乙）神さま　井上さん　太郎君

（丙）お母さま　お弟さん　御尊父さま

二　人代名詞

自稱	對稱	他稱	不定稱
わたくし わたし	あなたさま あなた	この（お）かた その（お）かた あの（お）かた	どの（お）かた どなたさま どなた

三　動詞

（甲）本來の敬讓語（〇印は連語を示した）

あがる・召しあがる（食フ、飲ム）
あそばす・なさる（爲ル）
いらっしやる（來ル、行ク、居ル）
おっしやる（言フ）
おぼしめす（思フ、考ヘル）
くださる（與ヘル）
見える（來ル、居ル）
めす（呼ブ、着ル、穿ク、乘ル、買フ）

〔以上、尊敬の意を含むもの〕

〇お出でになる、お出でなさる（來ル、行ク、居ル）
あがる、參上する（訪ネル、行ク）
あげる、さしあげる（與ヘル）
いたす、つかまつる（爲ル）
いただく、頂戴する（貰フ、食フ、飲ム）
うかがふ（聞ク、訪ネル）
ございます（居ル、有ル）
存ずる、存じ上げる（知ル）

たべる（食フ）
申す、申上げる（言フ）
まゐる（行ク、來ル）
拜見する（見ル）　拜借する（借リル）
拜讀する（讀ム）　拜聽する（聞ク）
○お目にかかる（面會スル）　お目にかける、御覽に入れる（見セル）（以上、（へり下る意、丁寧の意を表するもの）

（乙）敬讓動詞のつくり方〔○印は連語を示した〕

お歌ひ
遊ばす
なさる
下さる
に、なる

御苦勞
遊ばす
なさる
下さる
に、なる

○見て下さる、讀んで下さる（以上、尊敬の意を含むもの）

お届け
申す
申上げる
致す

お供
申す
申上げる
致す

○お届けする、お供する（以上、（へり下る意のもの）

（丙）尊敬の意の添へ方（助動詞「れる」「られる」を附ける）
父は英書も讀まれる。
今日は佐藤君も來られる

（丁）丁寧の意の添へ方（助動詞「ます」を附ける）
先生も仰つしやいます。
私からも申上げます。
先生もお歌ひになります。
私もお供致します。
紙が飛びます。

四　形容詞

（甲）「お」を附ける。
こんなにお暑いのに……。
お恥しい次第ですが……。

（乙）「です」「ございます」を附ける。
これは古い(の)です。
これは新しうございます。
それはお高い(の)です。
それはお珍しうございます。

五　形容動詞（「お」「ご」を附ける）

それはお珍しからう。
若しお寒かつたら……。
あそこはお靜かでせう。
あそこはお靜かでしたか。
そんなにご丈夫なら、もう安心ですね。
ご丁寧な御挨拶で痛み入ります。

六　副詞

おまめにお働きなさいますね。
どゆつくりなさいまし。
ここはお靜かではございません。

七

「で、ある」「だ」の意
助動詞「です」、連語「でございます」などを用ひる。
あれは學校です。
あれは學校で　ございます。
あのかたは先生で　いらつしやいます。
大將はその時、少將で　お出でになつた。

敬讓の意を含む文語動詞

（甲）

尊敬の意を含む語

あそばす（爲ル）
います、ます、まします（アル、居ル、行ク、來ル）
おはす、おはします（同前）
おほす（言フ、言ヒツケル）
おぼす、おぼしめす（思フ）
きこしめす（聞ク、飲ム、食フ）
しろしめす（知ル、統べ治メル）
たてまつる（著ル、乘ル）
たまふ、たぶ（與ヘル）
のたまふ（言フ）
まゐる（飲ム、食フ、著ル）
みそなはす（見ル）
めす（飲ム、食フ、著ル、乘ル）
わたる（アル、居ル）

（乙）

へり下る意、丁寧の意を含むもの

いたす、つかまつる（爲ル）
うけたまはる（聞ク、承諾スル）
さふらふ（アル、居ル）
きこゆ、まうす（言フ）
たてまつる、まゐらす（與ヘル）
たまはる（貰フ、受ケル）
はべり（アル、居ル）
まかる（退ク、歸ル、行ク）
まゐる（行ク）

國語假名遣一覽

わ（は）

わ（輪）
くち**わ**（口輪―轡）
おほ**わ**（大輪）
おも**わ**（面輪）
はに**わ**（埴輪）
わ（廊）
くる**わ**（廊）
わ（曲）
うら**わ**（浦曲）
いそ**わ**（磯曲）
あわ（沫）
あ**わ**もり（泡盛）
みな**わ**（水沫）
わけ（分）
いひ**わけ**（言分）
こと**わけ**（辭分）
おひ**わけ**（追分）
の**わ**き（野分）
わけがら（譯柄）
ひき**わけ**（引分）
わた（綿）

わた（腸）
はら**わた**（腸）
この**わた**（海鼠腸）
こわ（聲）
こ**わ**いろ（聲色）
こ**わ**ね（聲音）
こ**わ**づかひ（聲遣）
こ**わ**づくろひ（聲づくろひ）
こ**わ**だか（聲高）
わざ（業）
し**わ**ざ（仕業）
こと**わ**ざ（言業―諺）
わり（割）
こと**わ**り（事割―理）
し**わ**（皺）
ひ**わ**（鵜）
た**わ**ら（俵）
い**わ**し（鰯）
あ**わ**つ（周章）
た**わ**し（束藁子）
く**わ**ね（慈姑）
た**わ**やか（嬋娟）
た**わ**やめ（手弱女）
た**わ**む（撓む）

よ**わ**し（弱し）
か**わ**く（乾く）
さ**わ**ぐ（騷ぐ）
す**わ**る（坐る）
あ**わ**たゞし（慌し）
さ**わ**やか（爽か）
た**わ**いなし

語の中や下に來る「わ」は右に擧げた他は「は」を用ひる。例へば
川澤（かはさは）　粟瓦（あはかはら）　雞庭（にはとり　にはは）
桑諏訪（くはすは）　安房（あはは）　永久（とはは）　繩（なはは）
障（さはり）　廻る（めはる）　變る（かはる）　かはいらし等

ゐ（い）

ゐ（井）
ゐど（井戸）
ゐげた（井桁）
ゐぜき（井堰）
ゐづつ（井筒）
ゐくひ（井杭）

ゐで（井手―堰）
ゐなか（井中―田舍、田園）
ゐもり（井守―蠑螈、蝘）
ゐ（居）
ゐざり（居去―膝行）
かも**ゐ**（鴨居）
しき**ゐ**（敷居―閾）
くも**ゐ**（雲居）
くら**ゐ**（座居―位）
との**ゐ**（殿居―宿直）
まと**ゐ**（圓居）
もと**ゐ**（本居―基）
まゐる（目居る―參る、詣る）
ゐ　猪（ゐのしゝ）
ゐのこ（亥の子―豚）
ゐくび（猪首）
いぬ**ゐ**（戌亥―乾）
ゐ（亥）
ゐる（率）
ひき**ゐ**る（引率る―率る、將る）
もち**ゐ**る（持率る―用、以）
ゐ（藺）
お**ゐ**（大藺）
ゐぐさ（藺草）

あゐ（藍）
くれのあゐ（呉の藍—紅）
なゐ（地震）
うなゐ（髫髪）
かたゐ（乞食）
くわゐ（慈姑）
あぢさゐ（紫陽花）
ゐろり（爐）
ゐや（禮）
「ゐ」の假名をつかふ語は右に掲げたもので、その他、上に來る「い」の音は「い」を用ひる。例へば
糸　石　岩　池　犬
今　急ぐ　怒る　頂く　往ぬる
訝る　いたはる等

い音便
さいたま（埼玉）
さいはい（幸）
きさい（后）
ついたち（月立—朔）
ついたて（衝立）
やいば（燒刃—刃）
かい（搔—櫂）
かうがい（髮搔—笄）
たいまつ（燒松—松明）
ついぢ（築地）
かいしろ（垣代）
かいぞへ（介添）

さいて（咲いて）
といて（解いて）
ついで（次いで—序）
ついばむ（啄む）

加音
しいか（詩歌）
しいじ（四時）
むいか（六日）
語の中や下に來る「い」は右のものだけで、その他は「ひ」を用ひる。例へば
鯛　貝　鯉　笈　蠶　鶯
舞　謠　假令　小し　問ひ
疑ひ　買ひ　思ひ等

う（ふ）

う音便
あきうど（商人）
いもうと（妹人—妹）
おとうと（乙人—弟）
なかうど（仲人—媒酌）
くろうと（黑人—玄人）
しろうと（白人—素人）
かうし（格子）
かうべ（神戸）
こうぢ（小路）
てうず（手水）
かうぶり（冠）
たうげ（手向—峠）

ひうが（日向）
こうや（紺屋）
はうき（箒）
かうち（河內）
ひやうし（拍子）
まうで（詣で）
たかう（高う）
ならうて（習うて）
おもうて（思うて）
とうて（問うて）
かたじけなうす（辱うす）
まうす（申す）

加音
やうか（八日）
まうく（設く）
ややう（稍、漸）
にようばう（女房）
ふうふ（夫婦）
語の中や下に來る「う」は右の樣な場合で、この他は「ふ」を用ひる。例へば
食ふ　言ふ　思ふ　購ふ
補ふ　償ふ　仰ぐ等

ゑ（え）

ゑ（繪）
ゑま（繪馬）
ゑのぐ（繪の具）
ゑがく（畫く—描く）
ゑどる（彩る）

ともゑ（巴）
ゑる（彫る）
ゑぐる（剜る）
ゑむ（笑む）
ゑがほ（笑顏）
ゑくぼ（靨）
ゑつぼ（笑壺）
ゑむ（咲む）

ゑ（餌）
ゑさ（餌）
ゑぶくろ（餌袋）
ゑばこ（餌箱）
ゑぼうし（烏帽子）
こゑ（聲）
つゑ（杖）
つくゑ（机、几）
ゆゑ（故）
ゆゑん（所以）
すゑ（据ゑ）
すゑぜん（据膳）
すゑふろ（据風呂）
いしずゑ（礎）
すゑもの（陶器）
すゑひろ（末廣）
こづゑ（梢）
うゑ（餓）
うゑじに（餓死）
うゑ（植）
うゑき（植木）

うゑこみ（植込）
えぐし（蕨し）
上中下に來る「ゑ」は右の場合だけでこの他、上に來る「え」の音は「え」を用ひる。例へば
蝦　枝　簾　榎　蝦夷　夷
選ぶ　襟　似而非　得物等

え（兄）
きのえ（木の兄—甲）
ひのえ（火の兄—丙）
つちのえ（土の兄—戊）
かのえ（金の兄—庚）
みづのえ（水の兄—壬）

え（枝）
しづえ（下枝）
ずはえ（條）

え（江）
いりえ（入江）
ふえ（笛）
ぬえ（鵺）
はえ（鮠）
ひえ（稗）
さゞえ（蠑螈）
ながえ（轅）
え（柄）
こえ（肥）
やまごえ（山越）
みえ（見え）
はえ（生え）

いえ（癒え）
あまえる（甘える）
おびえる（脅える）
おぼえる（覺える）
さえる（冴える）
たえる（絕える）
ふえる（殖える）
中下に來る「え」は右の場合でこの他は「へ」を用ひる。例へば
家　苗　膚　楓　蛙　歸る
孵る　喘ぐ　敢へて　剩へ
堪へる　悶へる等

を（お・ほ・ふ）

を（男）
をとこ（男）
をのこ（男）
をつと（夫）
ますらを（丈夫）
みやびを（風流男）
さつを（獵夫）
をひ（甥）
をゝし（雄々し）
をす（牡）
さをしか（小牡鹿）
めをと（夫婦）

を（緒）
をどし（緒通し—緘）
たまのを（玉の緒）
はなを（鼻緒）
ほぞのを（臍帶）

を（小）
をぢ（伯父、叔父）
をば（伯母、叔母）
をす（小簾）
をがは（小川）
をみどろも（小忌衣）
をぐな（童男）
をとめ（少女）
をんな（女）
をなご（女子）
をみなへし（女郎花）
をぎ（荻）

を（尾）
をばな（尾花）
みを（水脈）
みをつくし（澪標）
とを（十）
をろち（大蛇）

を（麻）
をだまき（苧環）
をだまき（緒環）
をから（麻幹）
をけ（苧笥—桶）
をさ（筬）

を（岑）
をの（尾の上—岑上）
をか（岡—丘、陵）
をかぼ（陸稻）

をさ（長）
むらをさ（村長）
ふなをさ（船長）
しでのたをさ（死出田長）
をさなし（幼、稚）
をさをさ（大抵）

をち（遠）
をちこち（遠近）
をととひ（一昨日）
をととし（一昨年）

をる（折）
たをを（手折る）
をしき（折敷）
つゞらをり（九十九折）
しをり（栞）
しをる（萎る）

をこ（愚）
をこがまし
をこぜ（臘）
をを（唯）
かはをそ（鵰）
をしどり（鴛鴦）
をの（斧）
をり（檻）
をしね（晩稻）
あを（青）
いさを（功）

いさをし（績—勳）
ばせをし（芭蕉）
みさをし（操）
やをら（徐）
たをやか（嬋娟）
たをやめ（手弱女）
をとり（囮）
をかす（犯す）
をがむ（拜む）
をどす（威す）
をす（食す）
をさむ（治む）
をさむ（納む）
をさむ（藏む）
をしむ（惜しむ）
をしふ（教ふ）
をふ（終ふ）
をはる（終る）
をめく（叫く）
をのく（戰く）
をどる（踊る—躍、踴）
をる（居る）
あをむく（仰く）
かをる（香る—薫）
まをす（申す）
しをる（撓る）
をかし（可笑し）
をし（愛し—惜）
くちをし（口惜）
をさなし（幼し）

さを（竿）
つりざを（釣竿）
みさを（水竿—棹）
うを（魚）
いを（魚）
ひを（氷魚）
しらを（白魚）
いをのめ（魚の目—眈）
かつを（鰹）

右の外、上には「お」を用ひ、中下には「ほ」を用ひる。例へば
親　沖　弟　鬼　祖父　驚く　遲く　恐し等
顏　鹽　潮　火の穗（焰）
氷　郡　蟋蟀　透る　滯る
直し　遠し　通す等

中下に「ふ」を用ひ、文語では轉呼音で「お」と發音するものがある。例へば
問ふ　思ふ　買ふ　添ふ
願ふ　貰ふ　拾ふ　習ふ
訪ふ　沿ふ　乞ふ　扱ふ
害ふ　違ふ　誘ふ　纏ふ
事ふ　拂ふ　叶ふ　憂ふ

候ふ　扇ぎ　仰ぐ　葵　樗
近江　今日　昨日　倒る　貴し　尊ぶ等

ち（ヒ）

ち（父）
おほち（祖父）
をち（伯父—叔父）
ぢち（祖父）
ぢち（老翁）
ぢちむさし
をち（小父）
すぢ（筋）
うぢ（氏）
ぢ（路）
こうち（小路）
ひぢ（肘）
あぢ（味）
あぢ（鯵）
かぢ（梶）
かぢ（楮）
かぢ（鍛冶）
ひぢ（泥）
ふぢ（藤）
ふぢばかま（藤袴）
かうぢ（麴）
くぢら（鯨）
ことぢ（琴柱）

ねぢ（鋲）
わらぢ（草鞋）
なんぢ（汝）
なめくぢ（蛞蝓）
もみぢ（紅葉）
はぢ（恥）
ふぢな（蒲公英）
あぢさゐ（紫陽花）
みそぢ（三十）
よそぢ（四十）
いそぢ（五十）
むそぢ（六十）
かぢめ（搗布）
ちぢむ（縮む）
ねぢる（捻る）
とぢる（閉ぢる）
とぢる（綴ぢる）
はぢる（恥ぢる）
よぢる（攀ぢる）
ひぢる（濡ぢる—泥）
もぢる（捩ぢる）
ねぢける（佞る）
あぢはふ（味ふ）

「ぢ」を用ひるのは右の語だけで、他は「じ」を用ひる。例へば
虹　雉　籤　躑躅　交る
詰る　辱し　著し等

ず（づ）

かず（數）
きず（傷）
くず（葛）
はず（筈）
ゆはず（弭）
もず（鵙—百舌鳥）
みゝず（蚯蚓）
はずみ（機）
ねずみ（鼠）
あんず（杏）
すず（鈴）
すず（錫）
すずむし（鈴蟲）
すずき（鱸）
すずな（菘）
すずしろ（大根）
すずめ（雀）
すずし（生絹）
すずろ（漫）
ずず（數珠）
ずさ（從者）
ずはえ（條）
いしずゑ（礎）
くず（國栖）
こずえ（梢）
かならず（必ず）
たたずむ（佇む）

なずらふ（準ふ）
ひずむ（歪む）
すずし（涼し）
すずり（硯）
まず（交ず—混）
ゆず（柚子）

右の他は「づ」を用ひる。例へば
水　肩　泉　雷　酸漿　渦
煩ふ　貧し　續く　かゝず
らふ等

昭和七年十一月一日印刷
昭和七年十一月二三日發行
昭和八年七月二十日訂正再版發行
昭和十一年九月十五日訂正三版印刷
昭和十一年九月二十日訂正三版發行
昭和十二年十二月十八日訂正六版印刷
昭和十二年十二月二十一日訂正六版發行
昭和十二年三月二十日訂正四版印刷
昭和十二年三月廿三日訂正四版發行
昭和十二年七月十日訂正五版印刷
昭和十二年七月十三日訂正五版發行

定價
卷一—卷六　金六拾錢
卷七・卷八　金五拾四錢
卷九・卷十　金五拾壹錢

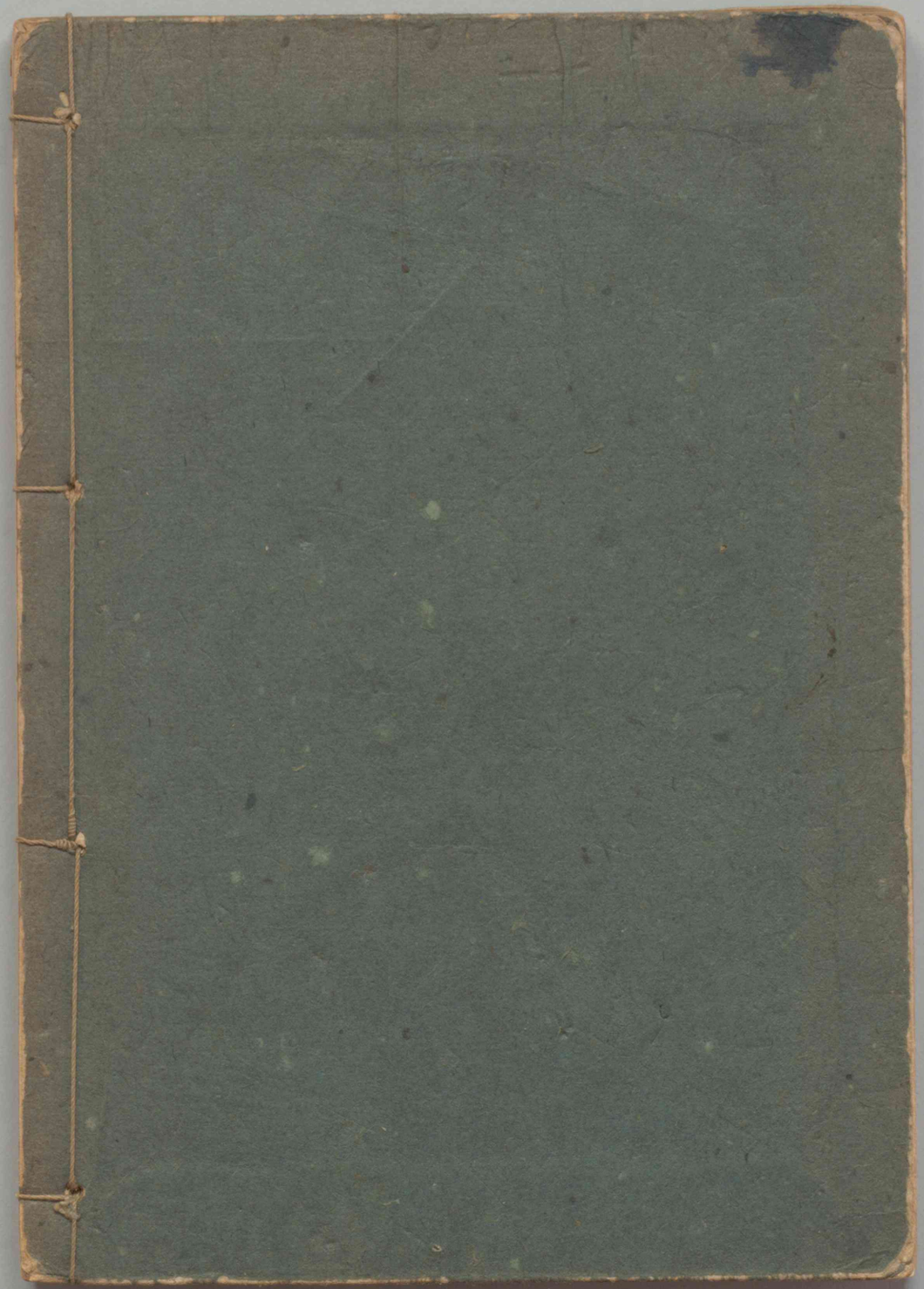
帝國實業讀本　改制新版

編者　芳賀矢一
訂補者　上田萬年
同　長谷川福平
發行者　合資會社　冨山房
東京市神田區神保町一丁目三番地
代表者　坂本守正
印刷所　精版印刷株式會社
大阪市西淀川區海老江上四丁目二十三番地

發行所　合資會社　冨山房
東京市神田區神保町一丁目三番地
電話神田三一七一—三一七八番振替口座東京五〇一番

HAGA 檢 賀 考

千早ぶる　神代より
聞かざりしかも
日の本の
國のつくしてめり
立ちかくれる山

三九　十四

栗栖　晴